女學雜誌

版權所有

各土曜日出版

第百六拾九號

當府內無郵稅

一冊六錢

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

雜 女 誌 學

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 169. JULY 6TH, 1889.

第百六十八號目錄

EDITORIAL:—Consecration (Heroines.)
LEADING ARTICLES:— Japanese Taste. Woman's Life. by Mr. K. Tokutomi.
CRITICAL NOTES: — " Satsu-Chiyo-To-Hi. " "Jiyokuse."
MISCELLANEOUS:— "To a Friend Returning Home for the Vacation." "Nature Worship." "Lady-Millionaires of America." "Woman's Decision of Character."
DROLLERY.
CHILDREN'S COLUMN.
BIOGRAPHIES:—Marcus Brutus and Porcia.
NOVELS.
GENERAL NEWS.

社説　犧牲獻身（烈女貞夫人）
論説　日本人の嗜味（藤の屋）○婦人の生涯（德富健二郎）
批評　薩長土肥○新住吉ものがたり○濁世を讀む
雜錄　暑休、家郷に歸る人を送る○天然崇拜○米國女子金滿家○敢て問ふ女子の決斷力○日本の言語の筆記○今樣のはなし○茶話三
見監　兵士の宥罪（しきたへ）
史傳　ブルータス及其賢妻
小説　酒鬼（藤花主人）
寄書　巖本先生及瀨下女史に一言す（秋洲健次郎）
新報　雨止む率ざ歸戸を繕はん○羅馬字會○浮雲○言文一致○文學界の伯夷叔齊○義俠社○女壯士○美人畫○人心彌よ倦めり○福島人物評○美人鏡○英國女子被撰擧權
片々　加藤錦孃○公立學校長拜命○卒業○演習○獨立女學○横濱より亦○外六件
外報　米國女子傳道會社○米國女大學生○保守黨婦人の遺書

WOMEN IN JAPAN.

(1) *Mr. Takasaki and Mr. Amemiya have introduced a new society for the encouragement of Japanese music.*

(2) *A barber by the name of Ueki of Kyobashi is gratuitously attending to the shaving of 54 persons in the asylum on the 17th of each month.*

(3) *A new society called the Fūfukwai (The Couples' Society) has been begun by Misses Sakurai and Takenouchi. About 100 couples attended the first meeting.*

(4) *The object of "Fujin Kiuseikwai" of Takata, Echigo, is to succour women who are falling into wicked life.*

(5) *Many of the Japanese ladies who had adopted foreign costume and foreign style of dressing of their hair are going back to their native styles.*

(6) *"The Chōya Shimbun" has offered a prize for the best essay on Woman's Education. "The Nippon" is to publish treatises from the highest authorities on the same subject.*

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌 第百六十九號
明治二十二年七月六日發兌

社說

○犧牲獻身

一○烈女貞夫人

梁川星巖の妻紅蘭女史の詩に、

四隣人已定、燈火夜闌殘、雪逆二月光一白、天隨二風勢一閉、
家貧爲レ客久、歲晏恨二衣單一、鼓半起炊レ粥、思二君吟坐寒一。

とあり、此は女史が其良人を懷ふの眞情を寫出したるものにて、語々皆な温たかなるやうに聞ゆ、中にも末聯、鼓半起つて粥を炊る、君が吟坐の寒さを思ふ、の二句に至りては、其の愛思の如何に切なるやを現す、一唱百歎の情致ありと云ふべし。　之を聞く、幕吏嘗て星巖を搜索して其家に到り嚴しく詰問したるとき、紅蘭は堂々として答へたりと、云く吾が夫は大丈夫なり、たとひ其奔るべき所ろ兼ねて定まりたるとも、安んぞ此如き事を婦女子に洩さんやと。星巖既に死してより、女史少しく狂したるが如し、驕慢無禮にして且つ錢を貪ぼり、談論する所ろ不遜卑劣にして聞くに堪へざりしとか云へり、然るに或者之に會して星巖の事を語り出れば、女史蕭然襟を正うして謹坐し、涙ハラ〳〵として落ち、翻然化して一淑婦となる、而して其の深室の一間は依然として星巖存する時の如くに整理し、机上塵なく、茵正しく、煙草盆まで備へ置れたり、女史此内に入れば更らに靜淑、言語風采極めて温雅にして殆んど別人の如くなりしと。紅蘭の其夫に仕へたるや實に謹しみ且つ貞なりしと云ふべし。　吾人日本古來の婦人傳を通讀するに、所云る神洲の氣節は凝つて婦女子の貞烈となりしかと思はるゝ多し、或は操を守りて自殺するもの、或は劒を揮つて愛稚兒を刺すもの、或は涙を灑ひで夫を諫止するもの、或は情を殺ろして人道を守るもの、如き、何んぞ其の氣節の純正潔白、雪の如く氷の如く白水晶の如きもの、甚はだ多きや。世人切りに丈夫の大和魂しひを誇る、然れども女丈夫の大和魂しひに至りては更らに絶類の品多きを知らず、請ふ見よ、其の凛々として物凄じき處ろ、其の烈にして潔ぎよき處ろ、其優貞にして執着する處ろ、其の謹直にして縝密なる處ろ、特に就中その女德を堅守して動かず、棄てらるゝも賣らるゝも殺ろさるゝも自殺するも終生終身決して愉るなきの清節高き處ろは、思ふに是れ外國の婦女子に比類なき最美の國粹なるべし。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

然りと雖ども、若し例を外國に求むるときは唯だ一つ之有り、彼れ稍やくにして我が神洲の女粹に匹敵するを見る、即はち徃古のゼルマン人種、未だ羅馬に入りて都てびざる以前の習俗に在るなり、彼等が一夫一婦は實に淸潔なるものにてありき、彼等が男女交際は亦た近世に類ひなきほどの者にてありき、特に其の婦女子の貞烈潔白なるに至りては、鬱乎たる北方の森林其氣淸しく、皚々たる嚴寒の白雪凝つて朝暾に映ずるの狀あり、吾人當時の史傳を讀み、貞婦節に死するの佳話に到る毎に、未だ曾て卷を掩ふて長歎せずんばあらず。」傳に云く、日耳曼種某酋にカムマと云へる一美婦ありき、羅馬の豪族某之を愛戀して止まず、自から權勢に誇りて暴りに之を奪わんと欲す、カムマ固より聽かず、豪族則はち之が良人を捕ふ、カムマ固より聽かず、豪族いよ／＼彼が良人を苦しむ、カムマいよ／＼聽かず、豪族思へらく之れ良人あるが故なりと則はち之を縊殺す、カムマ泣絶、走つて尼院に入りぬ、然れども豪族尙ほ之を棄つる能わず、連りに使ひを送りて之を誘なふ、終ひに自から尼院に到り暴力を以て之を取へんとはしたり、於此乎カムマ微笑して曰く、貴官夫れ如此く妾を顧み玉ふか、婦人百年の冥加之に過たるはあらず、只だ恨むらくは一と度び身を法界に托す、輕々しく俗に還るは頗ぶる神威を瀆がすなり」願くは暫らく待て、齋戒沐浴し、犧牲を献じて神に謝せんと、則はち衣服を更ため、綠髮を梳づり、異香馥郁として出づ、手に盛酒一杯を捧げて恭うやしく神前に備へ、默禱數刻立つて輙はち半杯を呑む、顧みて豪族に謂つて云く郎乞ふ半ばを盡せと、媚笑傾國の色あり、豪族未だ飮まざるにすでに醉へり、狂喜して滿引傾盡すれば、カムマ則はち酷笑し、倒伏して感謝す、ヲー神よ汝ぢ妾をして仇を復せしめたるを謝すと、辭ば未だ畢らず、豪族血を吐いて倒る、カムマ同じく倒る、神壇沈々、只だ怒叫と謝禱との幽かに消え行くを聞く。又傳す、云くエッポニアと云へる夫人ありき、其夫サビナス同志を率ひて反す、羅馬帝ベスパシアン大兵を送り一戰に之を打ち破りしとき、サビナス其妻を懐ふて遠く走らず、密かに其の家に歸りて地下の穴に隱れ、火を放つて家宅を火き流言せしめて云く、サビナス自殺志たりと、エッポニア外にありて之を聞き慟哭して倒る、地上に伏て食はず泣くと三日其聲路人の腸を斷つ、時に僕來り實を告げ良人死せざるとを知らしむ、エッポニア驚ろき喜こぶと云へども未だ輕々しく泣を止めず、晝は凋凄として叫ぶ、而して夜

は窃かに窟に入りて郎を慰さむ、日昇り人働らくとき夫人亦た憔悴として勞役す煩悶の狀殆んど禁じがたきが如し、而して夜に入てより亦た窟に下りて慰さむ、如此くすると凡そ九年に至ると、悲しむらくは九年にして事遂に露はる、此時夫人寧ろ樂然として良人と共に切らる。

思ふに此等貞烈の事少さか以て日本古來の貞烈に類すと爲すべし、西洋人本邦の婦女子を評する毎に、万人皆な必らず一語を寄せ來る、云く「デボーショナル」と、蓋しデボーションとは執着熱着の義あり、此評實に可、見よ何如に日本婦人の執着熱着ある哉、彼等が其良人を見ると天の如くありし、故に其の良人に貞あるや實に神に仕ふるが如し、昔しイスラエルの神は吾は嫉妬の神なりと云へり、如此く日本の男子は其の婦女子をして一個の良人の外に餘念あらしむるを許さゞりき、故に婦女子も亦た決して餘念あるなし、彼等が生るゝときより死する迄で、耳に聞き目に見る所ろのものは悉とく貞女不見兩夫の女道にてありき、故に其愛を二つにして情を他に割くが如きとは、彼の偶像を信じてエホバを忘るゝよりも更らに罪惡の事なりと思ひたり。之を以て其の愛情の凝結する所ろ其理想の結晶する所ろ悉とく良人の上に於てす、良人は獨一万能の主宰者にして妻は之に忠仕貞勤すべきもの也、其祈禱も感謝も涙も笑ひも悉とく良人の膝下に向つて呈す、此に於てか彼等が安心の地、立命の場、注視の點、は悉とく良人の一身に歸し、婦人は之によりて身を棄つるとあり、刃に伏するとあり、自害するとあり、水に投ずるとあり、首しむるとありし也。嗚呼吾人は今ま暫らく其行の當否を言はじ、只だ其精神の純潔にして、其の志想の貞烈なりしとに至りては、富士山碎け東海乾くと云へども何人か能く之を無みするを得ん。

吾人は如此き美談を聞く毎に常に數度び泣歎したり、嗚呼何んぞ其の美なるやと、然りと云へども今の世に於て吾人は尚ほ之に感服すべき乎、啻に感服するのみならず更らに之を希望すべき乎、啻に希望するのみならず更らに之を勸告すべき乎、啻に勸告するのみならず之を誘導すべき乎、啻に誘導するのみならず更らに絶叫して之を天下に宣言すべき乎。

汝等の飾は髮を辮み金を掛け又衣を着るが如き外面の裝飾にあらず只だ心の内の人即はち壞ろるとなき柔和恬靜なる靈を以て裝飾さすべし。

ポウロ

論説

○日本人の嗜味（其二）

藤の屋主人

畫を作る目的は恐らく一ッにてあらんか和洋の畫に相違あるは勿論全じ和畫でも狩野と丸山とは一目して味の異なるを見る、然るに一方に偏してこれを是非するものあらば具眼の人必ず其陋を笑はん。例へば古法眼や探幽を見て狩野は悉くかゝるものと思ふて畫は狩野に限ると云ふも迂あれども半年や一年間勉強せし狩野派の作りし拙なるものを見て狩野は厭ふべしといふも更に迂なりと曰はざるべからず。輓今美術論の盛なるにつれて畫を知らざるものも遽かに聞かぢりたる畫工の名をならべて喋々しく是を論じ、僅かに古道具屋にあらびたる油畫を見て西洋畫は風韻に乏しと難じ又素人畫師が塗抹したる薯蕷山水を見て日本畫工は配景法に拙なりと毀るは片腹痛き事ならずや。凡そ何事にもあれ各々長所を異にするは數の免かれざる處なり、長所既に異なれば短所も隨て相違するは當然なるに若し長所のみを稱揚し或は短所のみを非難し彼れ優れり是れ劣れりと判定するは最も偏頗なる批評にして識者之を執らず。鹿を追ふ獵師は山を見ず櫻を愛する人は毛蟲を嫌はず、山を見ざるにあらず毛蟲を嫌はざるにあらず、鹿と櫻を欲する念一層甚だしきを以て見るも嫌ふも意に介せざるなり。世人が西洋或は日本主義を論ずるは大抵是に類して油畫を可とするもの未だ日本名匠の作を見ず、見るも眼中既に日本なければ油畫をもて標準として是非の評をなし、甚しきに到つては露店に列ある山は薯蕷の如く川は索麪の如きを以て日本畫の代表者として辨難を試むあり。日本畫を主張するものも是に同じく、畫法の原理をも知らず唯探幽は云々應擧は斯々と無暗に先人を持出し骨力とか氣韻とか最も曖昧に其長を說去り又疎末あるクローム或は石版畫を罵て得意たるは笑ふべし。

然れども人の嗜好は其心意と同じく各々異なるものなれば田舍漢が東錦繪を壁に屛風に張りて珍重すると同樣に髪結床の肆の如く疎末なる石版畫を金緣の額に入れて樂しむものもあらん、又風雅めかして山は薯蕷の如く川は索麪の如き南宗畫を綸子仕立に表裝して來客に誇るもあらん、もし其人々に向て其石版畫は俗ありと云ふも何とて心服すべき又此南宗畫は拙なしと說くもやはか首肯すべき、其人々の趣味極めて幼稚なればなり。子供が義經辨慶の凧繪を無上に尊びて傍よりうすぎたなき文晁の山水を示すも否だと云ふが如く口を酸くし

ても到底爪繪を放擲せしむるを得ず。田舍漢が赤いものを好むも都人士が澁いものを喜ぶも趣味の相違（言ひ變れば趣味の老幼）にして都人士は恐らく田舍漢の野暮なるを笑はんが田舍漢は都人士の眞黒なものを何故に愛するかと疑ふべし。等しく通なる都人士の中にても万事黒ずくめの旦那風を好むも諸事古渡に限りやすと粹人らしきを有難がるもあるべし、縮緬の羽織ドッシリとして華族樣の如しと贊むるもあればニヤケて見つともなしと毀るもあらん。されば日本畫を愛する人は獨り合點しておのが宗派を高慢すれども西洋畫の趣味を持たざれば其妙を悟らず、西洋畫を好む人に畫法の原理に泡沫を飛すも日本畫の趣味に乏しければ其巧を知らず。影があれば光線の如何に關らずしてうましと贊め割合がキチンとして一分も違はざれば博物の掛圖も其眞を寫したと云つて感服するは未だ眞の妙味を悟りしにあらずして唯西洋の二字先入主となりて其腦を支配する爲めなり、今斯の如き人日本畫を見れば元より日本畫——否な廣く云へば繪畫の趣味なき事なれば半分の山屋根なき家多しと四條派を嘲り奈良人形の如き人物箱庭の樣な山水ありと土佐派を罵らん。又折釘を散した樣な竹をも葉の切れた蘭をも韻致ありとて暗雲に有難がるは是も趣味に乏しき人にて縱令ラフハエルを見るもアンヂエローを見るも其大名を知らざる中は俗醜と罵るなるべし。若し眞正の趣味を稱ふるならんには西洋畫も日本畫も何んぞ其區別あるべき唯秀逸あるをもて尊しとす。

誰にもあれ人は好奇心に富むものなれバ美術の上にも又珍奇なるを愛し、八歲の小兒が畫きしといへば縱令拙なしとも是を愛玩すると同じく、往古の最も無器用なる細工を古雅と云ふて荐りに珍重す。されども所謂好事家が是等最も無器用なるものを愛するは其細工よりは寧ろ古きを賞美し且は智識發達したる今人には摸すべからざる無器用を喜ぶあり。例へばある文學者がアラビヤ物語の餘りに荒唐にして其奇異譚は理學の進步したる今日にてはトテモ想像すべからざるを愛すると同一般なり。而して是等の好事家隨分世間に少からざるを以て油畫尊奉の人々は外國人が日本繪を好むを悉く好事の致す所とす。是最も眼界の狹き說にして趣味に乏きを示すが如し、尤も多くの外國人の事なれば或は雷同主義にて日本畫を好むものあるは猶ほ雷同主義にて西洋畫を愛する日本人あると同じからん、そは橫濱向の日本繪の極めて其精神を失ひたるもの多きにても知らる。殊に內外人の區別なく大抵は美術

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

心に乏しきもの多く雷同にて褒貶するを常とすれば好事心に驅られて貴重するもあらんが其初め歐米の美術社會に日本美術を唱道したるアンダーソン、ゴンス等の諸氏が其自説を演説し出版せしは好奇癖にてもあるまじく儲け仕事とも思はれず又其説は曲庇せしものとも考へられず。

尋常の古きを貴て無器用なるを愛する好事心ならば如何に語を巧みにするも其無器用を辨護して美となすを得んや。例へば上代の武具即ち弓矢刀劍の如き若くは食器衣料の如き今日に存在するもの唯古雅なりと云ふべけれど美と云ひ巧といふを得ざるなり、然るに獨り日本繪のみ美と云ひ巧といふて唱道するは唱道すべき理由何れにか存する故にあらざるか。又一方より曰へば日本主義の人が西洋には美術家なしと考へ僅かに日本人の油畫を見て平生目慣れしものと異なるをもて是を非難し風韻に乏しあど、悟り顔なる勿論迂拙にして憐むべけれど是等は眞正の趣味なき人々なり。先人渡邊華山及歌川某が西洋畫を見て大に發明せしは其卓識服すべし。さるを西洋畫は云々日本畫は斯々と物識ぶりて其短處をのみ攻むるは趣味に貧しき人と曰つて可なり。

唯繪畫のみならず凡てのもの皆然り、家屋の作り室内の飾り庭園の好み悉く人に依て異なれり。おのれ西洋風を好めばとて日本風をあんずるは西洋を蠻夷と罵る天保親爺に全じ。各々長所あり短處あり彼れの長を愛して是れの短を難ずるは十八間四方の大伽藍に驚きて一寸八分の尊像小なるを笑ひ日光の壯嚴に聞惚して禪家の菴室を嘲けるが如く識者の笑を買ハざらんとするも能はざるなり。昔し佛を信ずる老婆あり一から十まで何事も阿彌陀樣あらでハ濟まぬほどに思ひ常に人に語らく菩薩と曰はるゝ八幡樣でも蓮坐には立ち給はず卜。今の論者は此老婆と全じく蓮坐に立ち給はねば有難味薄き樣に考ふ、輙ち日本主義の人より見れば西洋風には風致乏しく西洋主義の人より見れば日本風には粧飾少なく、各々其宗派に心醉して蓮坐或は後光なくては信仰の念を薄らげ夜も日も阿彌陀樣ならでハ明けぬ事と考ふるは馬鹿々々しくもある哉。西洋風にせよ日本風にせよ其長を採らんには共に一種の味ありて何れを優るとも覺へず。ゴシックも破風造もパストも印度佛も噴水も小瀑も列べ來れば各樣の奇觀あり、然るに一の長を偏重してひたすら他の短を罵るは眞正の趣味あき人にして雷同能く此をして説を作さしむるなり。

人は曰く日本人は美術心に富むと、是れ最も謂れなき言にし

てもしある論者の云ふ如く車夫の家にも花を挿したる瓶あるをもて例證となさば凡そ如何なる人種にても美術心に富まざるはなからん。人肉を喰ふ最も野蠻なる人種すら顔に赤土を塗り鳥羽を髮にかざして喜ぶならずや。既にスペンサー氏も論ぜし如く人間は實用より寧ろ虚飾を尊ぶものとすれば無一物の車夫が朝顔の蔓を荒垣にからますも卑陋なる娼婦が葱草を格子窓に釣すも人間の通情にして美術心と云ふほどの事にもあらず。さは云へ此通情をもて美術心と云ふべければ美術心とは人間固有の情にして開明社會も野蠻時代も諸共に多少の美術心に富みて豈日本に限りて殊更に富まんや。東西を辨へざる孩兒すら赤く塗りたるデン／＼大鼓を餘念もなくながめ、無殘獰猛にして人情を知らざる蠻人も髑髏を腰圍に飾りて樂となす。よし大にせよ小にせよ高きとも低きとも其美術心たるは疑ひなし（もし美術心と云ふべくんば）。枯木寒巖に頼りて十方是空と放言する禪學者は枯木寒巖を以て金殿玉樓より美なりと大悟したる也。田舎漢がペンキ塗の安普請に驚きて茅葺の家（如何に風流の好でも）を冷淡に看過するはペンキ塗をもて更に美なりと考へし故なり。東山の銀閣北山の金閣もし千利休的の眼より見れば却て風流を缺きしならんが山中の松下に席を敷き枯葉を焼きて湯を沸し溪流の音を聽きて一碗を喫するなど心なき人より見ば物數寄とや思れん。もし金閣銀閣の美に驚きて更に物寂たる喫茶の樂を知らざるは未だ眞正の趣味を持たざるなり。外面の美に迷ふて無形の美を悟らざるは田舎漢が赤きを喜びて都人士の淡きを好むを笑ふが如し。謝安が東山に高臥せしも韓康が長安に藥を賣りしも顔子が一瓢の飲孔明が梁父の吟恐く趣味の生長せしに因せざるはなし。飢ては松花を食ひ渇しては泉に飲む流に嗽ぎ石に枕するも一派の人より見れば丹階朱簾よりも樂しくもあらん又美しくもあらん。されども是は仙人風の趣味として除き去るも日本人の美術心（若し美飾を好む人情を美術心と云ふべくんば）は僅かに朝顔を荒垣にからませ葱草を格子窓に釣すに止まりて高尚雅潔なる嗜好は極めて薄し。既に此の如く日本人は美術心に貧しきものなれば雷同に依て其嗜好を變ずるは左もあるべき筈なるが近日の美術論ほど馬鹿々々しきはなく、國粹保存と云へる主義は日本の美術をして太古の遺物の如くならしめんとし終には笑べきリベルチー・氏の説をも信ずるに至れり、又一方に於ては暗雲に西洋々々と日本美術を一括して罵却するものあり、彼も是も眞正の趣

味なき人にして短を毀るも長を見るの眼なし。

○婦人の生涯

德富健二郎譯

曩きにエディンボロー婦人大學教育會々頭の職にありしアベルデイン伯爵夫人は、近頃婦人の生涯と云へる題に就て一場の演説をなし、婦人たるものは其の家族に對し社會に對して其の職分を盡すを以て生涯の目的となすべきを説き、而して斯く爲すがためには大學教育の缺くべからざるを論ぜり、今其の大意を摘譯して我が姉妹の一讀を煩はさん、

(第一)現今の社會が婦人に要求する處は何ぞや、

衣服飲食其の他の事に於ける流行の壓制の甚ふして皆万事を擲て肉躰の歡樂を是れ求むるが如き、一箇の社會に二箇の道德の標準を設け一は男子の爲めにし一は婦人の爲めにし、日曜日には此を守り他の六曜には彼に循り、富貴の社會に彼を用ひて貧賤の仲間に此を強ふるが如き、若くは結婚の事墮落して數多の少女は皆富と地位とに己が身を賣り盡すが如き、是れ實に今日の情態にして、即ち社會が婦人に向て其の改革を促すものにあらざるはなし、苟くも之を改革せんと欲せばよろしく現今の婦人社會より一歩を抽きたるの婦人を造り出さゞるべからず即ち歡樂を以て一生の大目的となすが如き若くは流行を以て己が行爲の標準となすが如きことは嘲笑して之を拒むの婦人を養成せざるべからず、若し眞生の教育を受けたる婦人の一隊ありて社會に道德の麪酵を播かば、社會は之が爲めに膨脹し發達し其の汚濁を掃蕩し、國家の品位を高くすると豈にまた難しとせんや。

(第二)婦人は社會の外に立つ能はず、

婦人は決して社會上の問題を避くる能はず、結婚の事親子の關係兄弟姉妹の關係主僕の關係等の如き皆婦人の身邊に纏ふものなり、婦人は如何にして此に應ずべき乎、如何にして其の子女を社會に出でしむべき乎、今日の如く家庭に關する問題の疑はれ破壞せられまた新たに搆造せらるゝの時に當りては、如何なる準備を其の子女に授けて以て早晩起り來るべき其の困難に當らしむべき乎、婦人の職分素より多しと雖も其の尤も手近く且尤も必要なるものは即ち凡て己に關係ある所の者を扶けて彼の困難にして心細き其の事をも無難に經過せしむるにあり、然れども之を爲さんには能く事の輕重を量り能く物の表徴を認むるの力と、寧靜にして平準ある心意と、謙遜なる精神となかるべからず、苟くも新事件に遭ふ毎に忽ちにして熱中し忽ちにして沈落するが如き行様ならむには奈

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

何んぞ吾信ずる所を固く執るを得んや、また奈何んぞ時勢に應じて新たに事を建るを得んや、是れ即ち教育の缺くべからざる由縁なり。

(第三)婦人の働きの範圍、

今や社會の事にして婦人の手を待つて成るべきもの極めて多し、例せば彼の國中に充滿せる窮民の如き徒に金錢を與へ些少の慈惠を施す等を以て足れりとすべからず、よろしく深く其の奥底に入りて之を救ふの道を講ぜざるべからず、今日に至るまで若干の大胆なる婦人等が彼處此處に成し遂げたる處誠に多かりしとなれども、今後に於ては更らに教育ある婦人をして自から各般の事に當り彼の人民をして自から助くるに至らしめざるべからず、況んや婦人協同商法會の如き、寄宿學校の管理の如き、家内職業の奬勵の如き、皆其の手を待つものなるに於てをや、殊に婦人の一大職分とも稱すべきは政治上に其力を及ぼすと是なり、假令孰れに與するも政治社會をして今日の有樣に引更へて更らに高尚に更に潔白純粹ならしむるは是れ婦人の大任なり。

(第四)如何にして其の運動の準備をなすべき乎、

曰く盛んに教育を施すにあり、婦人教育の主とする所は精緻正確なる思想推理觀察言語の力を得せしむるにあり、而して在來の教育法は迚も斯く爲し得べき所にあらざるが故に、大學教育の已む可からざるを見るなり、故に若し其の機會を有する者あらば速かに入て學ぶべし學校もまた此等の婦人のために廣く其の門を開かざるべからず、或は「婦人の腦力は決して高等の學科を修むるに堪へざるものなれば、之をして大學の課程に就かしむるは即ち其の身躰を傷しむるのみ」と論ずる者あり、如斯き人は速やかに統計家の許に到りて、高等教育のために其身躰を損ずるの婦人と歡樂遊戯のために其の身躰を傷むるの婦人と其の割合の如何を質されんとを乞ふのみ、何にせよ婦人は實に大任を帶ぶるものにして殊に今代の青年婦人の如に到ては更に其の責任の大なるを見る云々。

夫人は更に一步を進めて「婦人の職分は必らず婦人的の精神を以て盡さゞるべからず、婦人にして一度男子の擧動を眞似若くは男子を氣取るとあれば事忽ちに破れその勢力は茲に歇むべし」と論じて其の演説を了れり。

眞理と虚僞と相撲たしめよ直ちに之をして戰はしむるより宜しきはなし誰か云ふ全能者に次ぎて尤も強きもの眞理にあらずと

ジョン、ミルトン

批評

○薩長土肥

撫象子

小林雄七郎氏著はす所ろの此書は近來出色の快文字と云ふべし、四藩の氣質を評定して

薩は　實際的武斷
長は　武人的智謀
土は　理論的武斷
肥は　文弱的智謀

となし、朝に在ては薩長の聯合となり、野に在ては土肥の幷立となり以て初めて國力を平均したりと云ふが如き、若くは今の政黨は恐く藩閥黨にして今の政府は當に聯立内閣たるべしと云ふが如き、而して將來の大勢滔々として進み來る所ろ少年の長ずるところ地方自治の盛んなるところ遂に此等の現象を打破して餘りありと云ふ所、一々實際に的中す能く當世を知るの智論と云ふべし、此卷一百二十葉左したる新理論あるにもあらず又格外の卓見識を發揚したるにもあらず、然れども其の烱眼直射して能く亂麻を分ち文氣一呵奔躍して大洋に入るの趣きあるに至りては蓋し近著中に多く得がたきの文也。

○新住吉ものがたり

ちどり

物語の中に住吉物語ほどにあわれに面白きは少なかるべし、文章幽にして麗らかなる上に時々の短歌皆な情を盡し、父の慈悲、まゝ母のくねり、はらからの愛、清き思ふ同志の交らひ、世を忍ぶ尼の心根、主にかしづく人の忠節なんど一々に備わり、全篇の余情掬するほどに感ぜらるは繰反して讀むも倘ほあき足らず思はるゝなり。　然るに此に形どりて作りたると聞く玲瓏山客の「新住吉物がたり」は開闢以來の日本歷史を姫上の身に托し、外人かわるぐ〳〵竊がひ來る趣きを巧みに冒流したれど、其の古雅高尙の點に至りては非常の懸隔あるを見るなり。　簡ろき物語に、

都のかたは霧ふたがりてそこはかとも見えず比叡の山はかりほのかに見えたりける景色物思はざらん空だにあはれなるべし况んや有がたきおやに引き別れなさけあるはらからを捨てゝいづちと行らんと思ひつゞけん心のうち何如計りなりけん是を見てあま君

すみよしの尼となりては過しかどかばかり袖を濕しやはせじ、然るに此の新らしきには、

仕那は先頃の鬱憤今日晴さで何時をか期せん勢設どくこの米蘭迷日頃の怨今日こそ思ひ知れよくもつね不斷われを輕蔑なして乞丐の如く取扱ふぞ思ふに逸ひし尼婆めと……

一は神仙談を聞く如く、一は卑しきわたりの喧嘩を承はる如く覺ゆ。

○改進新聞小說 坎坷山人著濁世を讀む

寥々子

「濁世」は一種の小說なり小說なるが故に必らずしも其事實の有無當否を論むべきにあらず此頃ろ右小說に付きて區々ありなど聞こゆれど此に吾人が其批評を揭ぐるは固より決して此等に拘はるにあらず全く別眼ありての論なり即はち只だ文學上の一論文として左の寄せ書を揭載すと云ふ（編者白）。

回を重ぬると三十八回日子二ヶ月に亘り世人をして特に女流の先導者と稱せらるゝ雜誌記者敎育家をして背を冷汗に浸さしめ或は長大息せしめ或は又一大警戒を要せしめたるは改進新聞第千八百十九號より全六十三號へ連載せる「濁世」と題する一編の小說とす予は素より坎坷山人と一面の識なく一回の談話さへなし得たる者にあらず故に山人の此小說を著せる主眼は何處にありて爲にする處は如何なるや其は極て知るに難し然れども何人も之を讀む近時姐子阿孃の風俗品行を疑むるに最もよき五寸釘なるを知るに足るべし近來女學校の風評殊に甚しく陰に陽に誹譏謗議するもの一にして足らず之を以て考ふるに山人の優しき志は敗德汚行の濁世に向て默する能はず世人に先立ちて之を發き世人に先立ちて之を戒むるの誠意に非ざる歟余の妄評少しく期に遲るゝの譏なきにあらざれども批評てふものは時好の變遷に投ずべき際物にあらず余の荒唐無稽の文或は此編の起因する處を穿ち得ざるも山人の眞意誠實なるを察し得ば亦以て濁世一編の小說は私の毀與褒貶を須たず世人に向て此が眞假を問ふべき價値あるを知るに足らん。

此小說は女學校長刑部塞一敎授水澄富貴牧師神鄕鐵彥大學生沼田秋三郞及び星川晃哉なる五個の敗德亂倫の男子と梁ヶ瀨順子滋池いな子全秀乃なる三人の破貞破行の女子より成り立ち其表題の濁世てふ文字は其肚裡に妊りたるなり此八人の男女が舞踏會に園遊會に校舍に寄宿舍に或は上野公園に靖國社頭に演し來れる活劇を寫せるものは即ち濁世三十八回の小說なり。

余は此小說を讀みて深く山人の腕前の程に敬服せずんばあらず第一此諷刺小說をして當時恐惶を興ふべき事實ありとせば世人に先立ちて之を發き輿論の幾分を聳動せしめたる敏捷の見識と第二に忌むべき八人の敗德亂倫のものを寫し出せる中に刑部其子母子の至孝節義あり以て相照し讀者をして感ずべく憐むべき情を起さ

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

しむるは朦朧たる月の急に爽けく雲を破るに似て點綴の妙目覺しくも亦壯快なると第三に文章的脩辭術にして幅員限りある日刊新聞の小說に在ては上乘なるものたるとに敬服せずんば非らざるなり。

嚮に改進新聞記者南翠外史「新粧の佳人」を著せり行文奇拔にして巧に當時の秘事を穿ち一讀呆然たらしめたり後又「疑人の夢」を出さる余大に南翠外史の好で這般の小說を編るゝを疑ひたりき今亦山人「濁世」を掲て讀者爲に背を冷汗に濕せり南翠子の時好小說を讀むが如き感あり山人は如何なる別號を有し何處の人ぞ惜むらくは山人の別號にして世に賞れたるものを用ひざるを。

余は「新粧の佳人」及び「疑人の夢」に於て南翠先生一種の筆力よ敬意を表すると同時に心窃に先生に一言仕りたきとありき今山人の「濁世」を見るに文體こそ違へ一種南翠先生の寫法と見受けぬ是を以て同感を起し山人の健腕に感ずると共に少しく思ふ處なきにあらず。

「新粧の佳人」と云ひ「疑人の夢」と云ひ或は「濁世」と云ひ皆是れ社會の眞相を穿たんとせしものゝ如し就中「新粧の佳人」「濁世」の如きは徹頭徹尾敗德亂倫の人物を寫すを以て主眼となせるに似たり之れ反省の力に依て世人を諷刺せんとするものなるべけれども是俗眼を眩すに過ぎず時好に適する小說を描くときは勢ひ俗に陷り常に優美を缺くと多きに見受らる少壯作者は知らず世の望を屬する小說家にして時俗の嗜好に阿り俗に陷て而して猶遇し得たり機に投じ得たりと爲すは余が深く悲しむ處なり。

余は山人の敏捷快活なる筆は能く諷世の文をして飛揚せしむるものと云ふと共に余は濁世一編の文章が（當時惡俗を感ずべき事件を貫寫するにせよ）余り汚しきに過ぎ嘔氣を催さしむと云はざるを得ず「濁世」は高尚優美なる點なきが如し且艶かしき言語文章を以て是等忌むべきの情景を摸寫したるは殊に余の此小說を賞せざる處なり之れ即ち讀者をして感情の變化殊に稀なるを覺へしむる所以にして敗德亂倫の人物道德を汚し風俗を紊るに在て其他は之を敷衍するに過ぎず徹頭徹尾厭ふべき敗德亂倫の人物事件を以て塡充せしは極て不快の感なき能はず。

遮莫是れ日刊新聞の小說のみ坎坷山人の卓見豈之を知らざらんや知て而して之を描くは蓋し時弊之を促すに在る歟噫余の山人に乞ふ處は優美高尚なるにあり時弊を矯むるの小說に絶對的の敗德亂倫を寫すとを願はざるなり。

以上は是れ濁世の總評にして卷中の細評に至ては紙面限あらん故に贅せず。

雜錄

○暑休、家郷に歸る人を送る

かすみ

女學生諸君將に家門に向つて歸らんとす、彼の朝たには共に起きて下讀みし、夕べには庭木鬱たる影に戯むれ、或るは燈下に古への聖人を慕ひ、夜深けて靜かに思ふ節を語り明したる、心友に離れ、個々東西に別れて去り行くなり、諸君の悲しみ察すべし。左れど遙かに想ふときは、家門には諸君を待つの人多し、幼なきは土產を待ち、長けたるは當世を聞かんとし、父母は健やかなるを見んとし、老翁媼は只だ撫でんとして指屈むめり、啻に之のみならず、庭の松はいよ〱靑く、門前の小河はます〱淸しく、相和して竹馬の主人歸り來ると音するあり、諸君此に向つて往く、樂しみ何如計りぞや。嗚呼人世の幸福は斯る修業中の時代にあり、諸君もし年老けて當日を顧みれば、殆んど夢中の仙界を思ひ起す如けん、今に於て宜しく深く味はふべき也。

○天然崇拜

比佐道太郎

我英雄の崇拜すべからず黃金の崇拜すべからざるを知る豈天然の漫りに崇拜すべからざるを知らざらんや已に之を知る豈敢て夫の野蠻人の愚に倣ひ心を日月の蝕に懾し色を雷霆の怒

に失ひ山川を祭り草木に事ゑんと欲するものならんや唯天然を觀察して己れの理想を養はんと欲するのみ其天然崇拜と云ふは彼此對立の語勢止むを得ざればなり理想とは何ぞや理想は人間の胸間須臾も無かる可からざるものにして民友氏の所謂人間胸臆の深室に點せる一團の活火是れなり人物の高卑唯此活火光燄の高卑如何に在るのみ故に理想秀邁卓絶なる其の人自から秀邁卓絶なり之に反して理想汚下卑陋なる其人自から汚下卑陋なるを免れず夫の光風霽月洒々として一點の埃を着けざるもの周茂叔の理想なり敬虔神に事え偉大純潔慾に汚れず氣を動かさず天地に俯仰して慙る所なきもの「ミルトン」の理想なり奮躍天嬌天馬の空を行く如く勇進直往火輪の鐵路を走る如きものは吾維新青年の理想にして復古の大業因て以て成れり翩々として節操なき雨に飄る殘花の如く泛々として定見なき波に漂ふ浮萍の如きもの今日青年の理想にして今や將さに輕佻浮薄、闇然人に媚る處女の如き風飄然利に趨く脱兎の如きの風俗世に滿たんとす噫何ぞ其甚しきや然れども此豈獨り彼青年輩の罪のみならんや四圍の境遇自から彼輩を驅て此の如くならしめたり吾人は此間に處して理想を有つて汚穢の風卑陋の俗に染まず亭々塵表に挺んでんとす豈容易ならんや世上固とより英雄豪傑尠しとせず然れども彼等は已に腐敗せり萎靡せり猫に化せる猛虎のみ霜に惱る菊花のみ魯縞だに穿つ能はざる末勢の强弩のみ取て以て吾人が標準となすに足らず嗟吾人何に由りてか胸間一片の理想を養はん書窓青史を繙て朝に古聖賢を友とし夕べに古英傑を親まんか孔子の聖プラトーの賢、ワシントンの誠大ナポレオンの雄略或は孔明正成の忠亮、ワット、フハルトンの忍耐、其温平として化育を助くる春風の仁、凛乎として懦を立て頑を廉ならしむる秋霜の義、或は世を濟ひ民を利するの功、天を驚かし地を動かすの業載せて史上に燦然たり之を讀んで之を想ふ時に或は神動き涙落るとあり以て幾多理想を養ふに足ると雖ども其人已に逝て長く黄泉の下に眠れり其言其行も亦殆んど盡ける佳肴珍饌に異ならず紙に臨んで空しく其香の鼻を撲を想ひ其味の頤を解くを想ふも取て以て腹に充て飢を療する能はざるを如何せん然らば則ち吾人の四邊を圍繞するもの一も取て以て吾人が理想を養ふべき者なきか否吾人は之を千里の遠きに求め之を百年の古に求むるを要せず吾人が客舍書窓の外吾人が故山茅屋の前吾人が眼光の及ぶ所吾人が足跡の到る處自から餘師あつて存せり孔子曰く仁者は山を樂み智者は水を樂むと

何となれば山の靜にして大なる望んで以て仁を養ふべく水の動て止まざる見て以て智を養ふべければなり吾人夙に起て庭前に歩し曉氣澄んで肌に透り林間影稍暗き時首を回らして西を眺め望めば朝暾早く已に富嶽の巔玲瓏の雪に映發して燦爛たる其光一朶の金芙蓉を中天に懸くる如し之に對するもの誰れか陋汚の念を抛ち去て秀逸の風神を發揮せざらん又吾人江の島に遊んで危巖千仞の絶頂に兀立して萬里の長風に嘯き眼を水天髣髴の際に抛てば渺茫たる其水膚落を浸し渾浩たる其潮異域に通ず其靜なるに當てや一碧萬頃白帆幾箇か其間に點綴して呼べば應んと欲し其怒るに當てや波瀾洶湧風に激して奔馬の如く乍ち巉巌に衝突して碎けて雪花となる此偉觀に對して誰れか偏狭の量を洗ひ盡して壯大魁偉の氣を惹起せざらん或は紅塵十丈頭を埋め車馬喧啾衣帽粉雜厭ふべきの境も日漸やく西山に舂き歸鳥遙に殘霞に沒して塵收り人去る後皓々たる一輪の明月山を離れ淸光銀の如く四隣を照して靜なるに至つて貪慾の念頓に消して純潔明白の念自から起る或は春風習々軟日四野を照して暖かに花紅に柳緑なる間幽鳥の間關聲を弄するを聞くや憂鬱の思乍ち解けて優游温雅の思自から生ず或は爛々たる星辰の繋る處皓々たる氷雪の凝る所峨々たる萬山聳えて天を摩する處百川の洋々と注て海に朝する處無心の白雲岫を出る處鳥飛に倦んで林に歸る處鯨鯢の潮を噴く處豺狼の風に吼ゆる處森羅萬象目を馳せ情を寄す各自天然の妙機其中に寓するを見るべし語に曰く山水秀靈の氣偉人を浩成すと又中庸に所謂ゆる天地に俯仰して博厚高明の徳を養ふと豈誣言ならんや吾人は固より詩人に非ず又人を誘ふて詩人たらしめんと欲するものにも非ず四圍の境遇吾人を驅て自から此言を吐かしめたり嗟天然爾は吾人が最後の良師なり無上の益友なり爾を以て標準となす何ぞ理想の養ひ難きを憂ひんや况んや百尺竿頭一歩を轉じて萬有の整然たるを觀察すると共に我人最後の眼光を放て神聖の意匠自から其中に存し眞理の光輝自から其外に溢るゝを認むるに至らば吾人が心を傾けて崇拜すべきの大能力者自から面前に現ぜん豈啻に理想を養ふと云ふのみならんや。

○米國女子金滿家

五月の流行雜誌に米國合衆國中の最も富みたる婦人を集め記るしたる左の如し、

トーマス、ヱ、スコツト夫人	フヒラデルフヒア　所有	五、〇〇〇、〇〇〇弗
メー、カーレンダー孃	紐育	二、〇〇〇、〇〇〇
ジヨセフヒン、ヒール夫人	專賣特許賣藥家	五、〇〇〇、〇〇〇
寡婦グリスチルド夫人	紐育	二、〇〇〇、〇〇〇
ヱーン、ブカーン夫人	銀行者寡婦	四、〇〇〇、〇〇〇
メリー、ドロルス、ピールス孃	紐育(十九才)	一〇、〇〇〇、〇〇〇

ジョセフ、ハリソン夫人　魯士亞に初て鐵道造りし人の妻　四〇、〇〇〇、〇〇〇
サラー、ケーナス夫人　カンサス　一〇、〇〇〇、〇〇〇
シエンレー夫人　ピッツスバール　二〇、〇〇〇、〇〇〇
ヘツチー、グリーン夫人　有名の數婦人　四〇、〇〇〇、〇〇〇
此他五百萬弗の身代一人、四百萬弗一人、三百萬弗三人、二百萬弗三人、一百萬弗二人。

○敢て問ふ女子の決斷力　　二世坊辨慶

決斷力とは事物の是非善惡を判斷するの力なりとは諸し誰れも知る所ならん設ひ之を知らざるにもせよ此力に依て判斷しつゝあるには相違なかるべし而れば今何が故に女子に向て此問を起したるやと云ふに女子は如何にして諸事の判斷を爲し居るぞと云ふの事實上の問題即ち是れなり。

斯く申せば姫君達は定めし立派な理屈を持來て切込んだのと思召て力まるゝ方もあろうが左樣では御座らぬ身共が身分は下等で女子仲間で云へば先づ下婢位いのものそれで當時の令孃とか姫御前とか奥樣夫人とか云ふ樣な人の心事は一向知らぬまだ交際したとがないから分らぬ筈で御座るそこで急所が知れぬ急所が知れぬから長刀がむまく切れ込むかドーか分らぬ去るに依て先づ男子たる此二世辨慶が此世を渡るに付て用ゆる所の一通りの決斷力の用ひ方を語りてそれから女子仲間の手本ともなる姫君と云ふものは果して此考がござるか辨慶の樣に自分で此力を使用なさるか又此考はないか自然と浮ぶ判斷力に打任せて居らるゝか將又此考はなくとも濟むものかを尋るので御座る。

扨辨慶が決斷力の用方は斯樣で御坐る小さい事でも大きなとでも一一比較をして見て後ち手を下すので御坐るが其比較と云ふは餘の儀にあらず道德とか智識とか衞生とかまだある色々の道に照て秤めて一番目方の重い所を見て極りを附けるのでござるうそこで一の例を掲げて見せる。

併し辨慶の持前は智仁勇の三でござるが此事はこゝでは語らぬ

一　同志の友たる二世落經に丁度十年目に廻り會ふた所落經が云ふに辨慶よ飛鳥山に行き一杯を傾け永々の話をせぬか互に利する所あろしぞと

　ソコデ辨慶が一一取調をするに斯樣でござる

德義よ汝は如何　答行くがよい〳〵　（時勢は變ても主從の契は變りませぬ）
智識よ汝は如何　答行くがよい〳〵　（互ひの經歷話は智惠を增します）
衞生よ汝は如何　答默　（運動にはなるが大酒をやると身を害ふそれ故私は返答が六ケ敷いドーゾ過度に飲み賜ふな）
次に經濟よ汝は如何　答行かぬがよい　（借金ができます）
次に勇氣よ汝は如何　答默　（私は此事には關係が少ふござんす）
目方の比較　行くがよい　四點
　行かぬがよい　一點　差引（三點）行の勝
外に默　二點　內飲み過すな一點關係少なし一點（此一點は此決には先づ不用）

決定　ソコデ辨慶行きます
　但飲み過しはせぬ

二　或日落經は靜と云ふ女房を持た其祝ひに舞踏會をしようと思ふがどーだと相談をした

　ソコデ辨慶が取調

德義如何　答するな　（破德の元其上此時節柄）
智識如何　答默　（先以關係少なし）
衞生如何　答默　（度が過ると運動は愚か明日の業ができぬ）
經濟如何　答するな　（不生產消費は不同意）
目方の比較　差引
決定　辨慶舞踏はいや

三　又或日落經曰く辨慶よ氷水を飲め幾等でもある黄水（れもんのとか）もあまた貯たるぞと

　ソコデ辨慶

德義ドーダ　答　關係が少ない
智識ドーダ　答　同じくだ
衞生ドーダ　答默　（コレラ）
經濟ドーダ　答默　（ドートも云へぬ）
目方の比較（ドレモグズ〳〵だから點數がないソコデ差引もナイ）
決定　二杯飲む

（此決定六ケ敷イツマリ衞生と經濟の目方の爭ひ飲み過すとコレラコレラは辨慶イヤシタガ氷を打潰て置けば水になるソコデ一寸見たら水にしては損の樣に見へるじやと云てダブ〳〵やるとコレラにならいでも病む藥代が澤山掛るソコデ「其澤山の藥代」と「氷が水になる代金」とを一寸比較して見るに藥代の方が餘計に掛るソコデ經濟も思ひ換へて云ふに「それでは却て水にした方が德」「其上死ぬるとを思へば何ほのと」とそこでダブ〳〵は衞生も經濟も不同意コヽデ程能き所二杯。

　右は一寸の例で智、德、體と區別すれば經濟は智勇氣は體の內に含有いやソーデナイマダ〳〵較べるものが澤山あると喧嘩も起ローがそんなとは
　　コヽデ語るのではナイ

一二の例を掛けたらこんなものそーなるとサー物事が六ケ敷なる面倒になる程輕卒の行ひは出來ぬ着實になる失策が少なくなる「トートー」切抜けて獨立が出來る。こゝで姫君達の御詞「辨慶さんとしたとがそれ式の事でありますか決斷力の用ゐ方其位のとは百も知てラー失禮な」、口の賢い於方へ「フイデニアバン」と御尤々々それなら今一條物語らん「モノドモ」一寸氷水を二杯持て」。それなら朝起きて寢衣を着換るときは何とも思はずに着換へましようかな朝飯晝夕飯も決斷なしに食ひましようがの辨慶は寢着物も飯も決斷あつて然るなり姫君

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

達は決斷を爲つても目方の比べ樣が善くないからのヿでござるましてや決斷力を天然に打任せて置き飯は食ふものじや着物は着換へるものじやとも何とも思はずにやつて仕舞ふからのヿでござる。

辨慶は箸を右手に取るとき「うら決斷力」飯を一箸挾むとき「やれ決斷力じや」と一致す姫君達は「うらやれ決斷力」と爲さりますか　昔しの姫君達は大分心得が宜敷いそれがうそなら拙者が仙臺萩と云ふ所に行た時に於政と云ふ後家に出逢たヿが御坐るが於政後家は息子の千松を殺された話をした辨慶至極同意息子の目の前で殺されても涙一滴目に持たず男優りの政岡がで御坐る隙〻決斷力で極め込んで忠と云ふ字を肝に刻んで居るから涙が出ぬ愛情も慾情も忠に較べて目方が輕い辨慶も其時物語り拙者も京都で「於あさ」と云ふ女房に出會て娘「しのぶ」を吾手で殺して御坐ると話した於政も感心拙者決斷力でかね〴〵極め込んで居るから女房に出會ても情も起らぬ其外小野小町にも出會た鎌倉では顔代御前と云ふ人にも出會た皆〻宜敷い決斷力使用法甘ひずる〴〵べつたりの天然打遣判斷では迚も此んなよは出來ぬ考へて見るがよござる無理に錦繡を着けいでも襖のない稀の腐い着物でなくとも優美は出來る姿勢も成る香水白粉べたぶんでなくとも立派になる。蓋し令嬢諸君女子は女德を以て第一の貴きものとすとは此辨慶のみ唱ふるには非ざるなり茲を以て其女德を基礎として一事一物悉く之に比較し以て決斷力を自ら使用するときは遂に同權も成立すべし獨立亦成るべし。

姫君達此辨慶は斯く決斷して御坐るしたが長刀が急所に切れ込むかどうか其上百も知て御坐る姫達も御坐ろうが兎に角どうして物事の決斷をして御坐るか返答が欲ふ御坐る事に依たら七つ道具は愚なと三井寺の鐘も擔き出すで御坐ろう喝。

○「日本の言語」の筆記

當日傍聽者一人

女學雜誌前號に掲載有之候日本の言語と題し皇典講究所に於て佐藤寛氏の講演せられし八木稱二氏の筆記は拙者も參聽致し候處同氏の筆記は大ひに誤謬有之候樣におぼえ候佐藤氏の講演にはアイウエオの横行について將然確定已然等の意味を說かれ候處八木氏の筆記にはアカサタ等の縱行について說明されし樣に筆記されてあり英語の變遷を述る處も頗る疎漏に且つ不順序に筆記されチヨーサの名前さへ忘れて記さずノルマン侵入の話もかゝず堀秀成の著も日本語學傳といふ書は無之佐藤氏もしかいはず其外國民の教育に掲載せし萱了法氏の論文について佐藤氏の批評せしを八木氏の筆記には井上圓了と間違へてあり如何に共に眞宗のボーさまなればさてこんな疎漏な筆記の仕樣はあるまじき事なり彼此八木氏の筆記は原演者の主意を誤るとも不少佐藤氏に取てはかやうな筆記をかゝげられ候事頗る迷惑に所有之局外の拙者見るに見兼て同筆記の誤謬不足信事を證明し貴誌に投じて讀者に告ぐる者なり頓首。

○今樣のはなし

高橋おろか述

今樣唄の曲節は高尙優美にして、人身を激動せしむるの力乏しと雖も、また精神を爽快ならしむるの、妙味を含めり、然れば今日に於るも、或る社會に至りては、其の曲節を賞し、其の唱歌を唄ひ、以て快樂をとると、常に聞くところなり、蓋し今樣唄の濫觴をたづぬるに、和訓栞に云、郢曲に今樣あり、土師連八嶋がうたひ初しよし、太子傳に見えたり、物に今樣うたとも見えたり、承安四年に今樣合といふ事あり、選二善謠者三十人一、限二十五夜一判二其優劣一と、玉海に見えたり、百錬抄に、師長、資賢等爲二判者一と見ゆ云々、承安四年ハ高倉天皇の御代にして、紀元千八百三十一年に當れり、此年代は、平清盛、天下の大權を左右するの時にして、妓女を入るゝを好む、故に歌舞曲節に通じたるもの、藤原通憲あり（剃髮して信西と號す）此人白柏子の裝束舞振を改良したると東鑑に出でたり、然れば此時、今樣の流行したると疑ふべからざるなり、是れより先き、貴族的なる、所謂公家衆に於ては、既に唱はれしと見えて、嬉遊笑覽に云、今樣、紫式部日記に、わかやかなる公達、いまやう歌、うたふも、ふねにのりおほせたるを、わかうおかしく聞ゆる云々、また、清少納言の、枕

草紙に、濫入すけたゝは、いみじうあらく〳〵しければ、殿上人、女房は、あらいにとぞつげたるを、歌につくりて、さうなし（無左右）のぬし、（主）をはりうと（尾張人）の、たねにぞありける、とうたふは、尾張の兼時が、むすめのはらなりけり是を笛にふかせ給ふ（主上の御笛なり）云々、其外續世繼等諸書に見えたれども云はず、今彼是に因て案ずるに、今樣とは、當時に作り出せる歌にして、文字上に定則はあらざりしが如し、然れば、平家物語に、佛御前が、君をはじめてみる時は、千代もへぬべし姫小松、云々、また、義經の妾靜が鎌倉鶴ヶ岡にての舞曲に、吉野山みねのしら雪ふみ分て、入にし人の、あとぞ戀しき、或ひは、しづやしづ、しづのをだまきくりかへし、昔を今に、なすよしもがな、と即座に吟詠しつゝ、舞ふるまふたるものなり、以來これらの曲節は、演劇なる花子（女役）に、傳りて、此徒の小歌を秘曲とせると、平家物語考證に出でたり、然れば、今日今樣と稱する歌は、天台座主、慈鎮和尚の四季の今樣あり、七五、七五とたゝみ、八句にて了る、是をおしなべて、今樣と云ふ、則ち前に引る、佛御前のうたへる、君をはじめて、の歌と同格なり（此僧は鎌倉幕府時代の人にして、紀元一千八百八十五年即ち嘉祿元年九月廿五日寂す）然れども、歌舞音曲は、社會のありさまに從ひ、自然變化するものなれば、其曲節に至りては、今とは大同小異を、免るべからざるべし。

〇天神の財府

ある所にて床に渡唐の天神の像をかけをきたるをみて、猿智惠なる者あの腰にさげさせられたる、きんちやくのやうな物は、何でござろうといへば、かたへの人あれは聖一國師の夢想に見へさせられしときの御影もろこし無準禪師よりの印可を入させられたる印可袋といふものじやといへバ、かの者いや〳〵それではあるまい、あの天神はつくしへ旅をあそばしたほどに、道中で何やかや入させられた袋であらふ、其しやうこには今の世までさいふの天神といふほどに。

〇大名はくらべ物

肩をうち臂をつぐとは、まとに富饒繁花のちまた、江戸日本橋に日用二人居たりし、かゝる所に供まはりきらをみがき、大勢をつれられたる大名登城なされけるを一人の日用申やうさて〳〵きれいなる御供廻りかな、われハ何樣といふ御大名

じやといふ、一人がいふやう、われは其國の御主たれ様といふて五十万石のお大名じやと、其次に又乘物をはやめてはい〳〵馬かたつあと、先供こゑをかけて大名登城なさる、又一人いふは、これもきれいなる供まはり、どなたじやといふにこれは何といふ所の御城主一万石のお大名じやといふ、其とき一人の日用横手をうつて、何事も過去よりの定りといへど先のお大名は五十万石、いまの大名は一万石、先のと今のとは四十九万石のちがひじやが、供まはり馬乘物諸道具、あまりちがひはないに後の大名と我〳〵は、わづか一万石のちがひあれども、此なりを見よといふてあきれた。

○ぢごく極樂のりんき

嫉妬ふかき女の胸と、上戸の額はいつもあつきといふ心にて盆の前にもたとへしずかし、さる所にりんきふかき女房ありて、せけんもはゞからずよるひる夫をせがむほどに、次第にやせおとろへ、これを氣病してついに死にけり、近所よりとぶらひにゆけども人の内義たちの悔みづかひには返事もせず一門どもあまり見ぐるしがり、もはや此世に居らぬ人のとじや、ふつゝりと思ひきりやれといへば、それはどうよくなとをおしやる、ぢごくごくらくへもいたづらな女の死でゆくまひものでもない、さいの河原のおんばい年ごろはいくつばかりで御座るぞ、もし後家ではないかといふた。

見 籃

○兵士の宥罪　しきたへ

米國某都の片田舍、作り飾らぬ家居の様、豐かと見れば厨房にて炭焚の業を手にするは此の家の娘ブロッソム、奴婢の一人も使わぬは生計の度を知り得べし、客間と覺しき所に一脚のテーブルを据置き此家の主チヤウン物案じげに客のアーレンと物語りつゝありけるが主はホット長大息つき　アーレン氏國の御爲めと存じ一子ベニーを兵役に差出したるその時は廣き世界に我が如き貴き捧げ物をなせしひとよもあるまじと存じ居り候ひき、我が子ベニーは勇壯にかつ賴みがひある者なりしに守兵の役を務めし時一分間唯だ一分のその間睡りたるよしに聞けどベニーに限り務めの怠りにて眠るようなる者には非ず、身の丈は父にも均しく候べしさりとてまだ十八歳の少年にて壯健なる質にもわらず僅かに守衛の場所に於てまどろしみし其ために悲しや砲殺の處刑になるとは、廿四時間電信文の表には二十四時のそのうちに彼が命はなしとの事今

は何處に居る事かと眼を濕ませ說き出る話しを聞いてアーレンは　さな歎き給ぞチウン君祈禱の外は候まじ　然かり〳〵神は惠に富み給へば祈りせんに聞き給はざる事やある思ひ廻せばペニーが家に在りておのが腕をさしのべ誇り氣に國家の御爲めならんには人とありたるそのいちに必ず力を盡すべしとの大なる右の手を劒取る事にのみ使はんには痩せ細りたるぞましならめと勇ましくも申せし事今は昔しと成り候ひぬ門出の時も行けよ行け神は必ず守り賜ふと申せしが、神は彼れをば守り賜ひし事あらん。此物語を傍らにて立聞なせしはペニーの妹ブロッソムにて兄の危急を聞く否や曇る眼を鎖じもせず心の鼓動を押靜め何氣なき躰にもてなせり納戸の方にて音づるゝ聲に應へて立ちあがり戸を開き見れば隣人某が一通の書を差出せりペニーよりの便り然りこれ今や死なんとするペニーよりの書ありオウンは書をば取りたるものゝふるへる手先に開きもならずアーレンの方に唯差し出したるのみアーレンは軈てかの書を開て讀み出でけるは

此書御手元に到着いたし候頃は我身は既に永遠の旅に趣き居候事と存候、死と申し候事始めは何となふ恐く存じ候ひしが今に相成り候ては物の數とも存じ候はず、多く人々も縛めの繩あるひは目掩ひ等もいたさずと申され候故なほさら男らしき死樣いたし度と存候併し唯だ口惜しと存じ候は死後必ず花々しき戰可有之其せつ戰場に出で合さずして殆んど不忠なる犬の如く務めの怠たりに落命いたし候一事に御座候しかし此の後卑怯の擧動ありて父上の御名を汚し候ようの事ありては相成らずと覺悟いたし居候

チウンは聲をふるわせてさるけなげある覺悟いとおしの我子とく〳〵跡をよみたまへ

史傳

○ブルータス及其賢妻（下）

ブルータス既に羅馬を去ると云へども郷關の報を聞く時は未だ曾て奮立せざるとあらず、特にヲクタビアス既に帝位に登りてシーサルと稱し、自由國の自由大ひに蹂躙せらるゝを見れば更らに慷慨躍立せざるとあらず、彼れ伊太利に遊び、又た亞細亞に渡りたりと云へども、其の明媚なる風光及び幽清なる東國の空氣も尚ほ彼が不平を解する能はず、ブルータス遂に兵を率ひて本國に歸らんとを決す。

時にカッシアスはシリアに在り、ブルータスが志ざしを聞き

て來り會し、相合力せんと約す、荷氏は性猛烈にして且つ少しく猜忌の質あり、固より俊英なる軍將たりと云へども少しく人を容るゝの量に狹し、故に其の人を支配するや之を愛するに因りてせず寧ろ之を恐るゝに因りてす、其の運動するや國民の自由を尤も多く愛ふるが爲にせずして寧ろ稍や其權力を慕ふが爲にす、而してブルータスは是れ正義廉潔の士なり、其の上下の人に同一に愛敬せらるゝのみならず其敵すら尙ほ之を慕へり、其氣質は温和、其量は寛大、其說を守ると確固不拔、正義節操のある所ろには居動山の如し。此二人品性固より同じからず然れども彼等よく和敬して互に重きを推す、ブルータス曰くカッシアスは是れ最後の羅馬人也と、カッシアスは曰くブルータスなくんば吾れ爲す可らずと。兵を擧て將に亞細亞を發せんとす、前夜軍卒悉とく眠る、篝火燃え、馬伏れし、虫聲僅かに聞ゆ、ブルータス万事を理し了り、獨り火下に書を讀む、時に忽然として一異形目前に現はる、ブルータス凝視して曰く汝ちは何者ぞ抑そも人か若くは神ありや、異形のもの幽かに答へて曰く吾は惡鬼にして汝に害あらんとするものなり、後ちフヒリッピに於て再會せんと、ブルータス毅然として曰く、可し、而會すべし。

翌朝之をカッシアスに告ぐ、カッシアス哲理を論じて切りに其事由を辨ず。

ブルータス等が軍フヒリッピに到る、シーサル又たアントチ

ーと兵を合して之を逆ふ、此時ブルータス書をカッシアスに送りて曰く、余が現今の地位は尤も樂しみある地位あり、何んとなれば勝てば則はち羅馬の爲に自由を回復すべく、死すれば則はち奴隷の束縛を受るの苦わらざれば也と。兩軍相ひ對す、戰意勃々たり、時にブルータスの軍中惡兆あり、特にカッシアスの陣下に於て尤も甚はだし、或は云く花冠摧けたり、或は云く異鳥大ひに翱翔すと。カッシアス甚はだ憂ふ、然れどもすでに明朝を以て會戰の日となしたり。

前夜ブルータスは將校を招ひて會飮し、歡こびを盡して哲理を論ず、只だカッシアスは知友數人と共に密室に入り、顏色青白にして大に疲勞したる如し。すでに夜明けて曉鴉梢にさはぐ、全軍早く激して只だ號令を待つ、人馬足を鋒だてゝ立つ。カッシアス一騎走つてブルータスに來り、馬より下りて手を握り從容として曰く、今日の戰ひ吾等必らず利わりと信ず、然れども若し不幸にして万一復たび相會すると能はずんば此見を以て終はりとせん、故に問ふブルータス、君が安んずる所ろ果して如何んと。

ブルータス答へて曰く吾年少にして事に慣れざるとき、嘗てカトーの自殺を聞きて甚はだ不可なりとし、失敗困厄の來るとき自から殺して其害を逃るゝは不情にして且つ不正なりと思ひたりき、然れども今は則はち然らず、天もし吾等の上に惡運を下さば吾等は亦た別に善運の來らんとを願はず、只だ之に滿足して死せん、余は過る三月來一身を國の爲に棄てたり、爾來余は只だ自由と光榮との中に生活するなりと。カッシアス曰くよし、既に此勇氣あり、たとひ以て敵に勝つわたはずとも決して敵を懼るゝとなけん、吾等正に進むべしと。

赤旗出て、鼓鳴る、ブルータスの人馬逸足して進む、カッシアスの軍後れて進む、ブルータスの軍敵の中陣を破り去るとき、敵の左翼めぐりて後へにあり、カッシアスに向ふ、其右翼亦轉じてカッシアスの横に出づ、故にブルータス全く敵の中軍を破滅するとき、カッシアス正に敗走し、小丘に登りて自殺したり。

然れども此日勝敗を算するに好運素よりブルータスにあり、たとひ一名將を失ふと云へども、敵卒の死傷算ふ可らず、故にシーサル等の軍大に萎微し、ブルータスの兵極めて奮ふ。翌日再たび會戰す、嗚呼此の英雄ブルータスの軍機妙あらざりしにあらず、其の懸引巧みならざりしにあらず、其軍卒强からざりしにあらず、只だ夫れカッシヤスに屬したる敗軍の

の兵頓かに之に加れり、隊伍進退の習少しく異なるによりて、軍勢一途に出でず、前後少さか齊わざる所ろありて敵鋭之より侵來す、悲しい哉、ブルータス遂に敗る。

此時カトーの子マーカスは大刀を揮つて敵軍に切り廻り、ルシラスは自からブルータスなりと名のりて捕へられ大ひにアントニーを罵りたり、而してブルータスは數卒を從へて山中に入る。

既に夜となれり、遙かに望めば戰場に炬火閃々たり、彼處には殘兵相合して對山の嶺に據り、此方には敵軍勝ち誇りて高く篝火を燃やす、ブルータス山窟に入りて之を望見し、一士を送りて對山の吾軍に使ひせしむ、若し彼に達せば一狼火を擧げよと云ふ、時久しうして其火を見ず、時に皆疲れて大ひに渇く、從卒兜を脱して谷川の水を掬む、ブルータス天を仰いで星辰を眺め

ジョウブ神よ、此の大敗の元因を記るし玉へと、

瞑目沈想、暫らくして從卒に耳語して曰く、余は終りに至る迄自由を守り、又終りに至る迄で朋友に離れず、此れ人世最大の幸福を得たるなり、今まや當に死すべし、死するも吾國民を警醒するに足らん、汝等請ふ終りを全うせよと、從卒慟哭す、ブルータス之を勵まし、一人をして劍を倒さまに立てしむ、彼れ則ち一躍、飛び下りて其の喉を貫ぬく。

史傳ポルシアの終りを明記せず、或は云く彼れ之を聞て自殺したりと、或は云く之を守るもの戒しめて刀劍を奪ふ、ポルシア止を得ず間を見て燃えたる炭火を口にして死せりと。

小說

○酒鬼（其七）

藤蔭主人

酒は飲むべし飲むべからず、少飲に止むれば百藥の長、度が過れば延命の良藥は忽ち氣狂水となる。常は柔和忍辱にて佛さまジヤと云はるゝ心よしも醉ば惡鬼羅刹の如く火をふかぬ計りに罵りわめく。されば罪は酒にあるかと云へば淳于髡は七八斗を傾くるも亂れず大笑して國家の誤を救ひ、李太白は長安の大道に醉倒るゝも天子の招聘に腰を折らず、酒に咎はあらず飲む者の賢愚に依て其果を異にす、人名字書に名を殘するゑらいお方は皆酒好と上戸は饒舌にて理窟を云へど。山田の大蛇の昔より酒に魂を奪はれてあたら財寶を飲み悉し二ツなき命を棄てゝも杉葉立てたる極樂に遊ぶが嬉しと管卷く無分別者ぞ多かる。大禹は亡國の媒を造りしとて儀狄を疎んじ

世尊は飲酒戒を立てゝ、娑竭陀を誡しめ給ふ、西も東もをしなべて酒飲むがよしと教へ給ひし聖人はなきに。魏軍百萬を虎髯にて嚇かしたる張翼德も醉つぶれては匹夫下郎に寝首を取られ、忠義に凝たる小山田庄左衛門も雪見酒の銚子には末代までも汚名を流せり。謹しむべきは酒、名からして恐ろしき般若湯。飲む者の賢愚に依るなれど賢人めかして掃愁帚としやれずとも飲まぬほど安心あるはなし。人參飲んで首縊る白痴ありとも人參が毒と云ふわけもなきに五合の德利傾けて一時の憂を忘るゝとも是が藥とは申されまじ。一杯は人酒を飲み二杯は酒酒を飲み三杯は酒人を飲むと唐人が誡もアムプルが一杯は我が爲に二杯は友の爲に三杯は樂の爲に四杯は敵の爲にと云ひしも異邦全滅に節制の理を述べしなるが。淺ましき凡夫心の人間に節制が守れるならば是ほど手輕な説法はなけれど、守りがたきは此節制にて知りがたきは己が酒量にぞある。節制を守るは例はゞ親知らずの危きを走るが如し、陸はサハラの廣きも駱駝の背にて進むべく水は太平洋の深さも甲板の上に鼻歌うたふべきが千丈の絶壁見上る計りに絆つ岸邊をドット押寄する大浪に取られじとひた走りに駈るほど難きはあらじ。大濤に卷込まるゝは元より易く絶壁猶ほ木の根岩角に攀ちて登るべし、もし節制を守るの難きを知らばいつそ禁酒が優なるべし。萬事節制ジヤとソクラアスや孔夫子を引合に出すは野暮の骨頂、世界の人がこんな聖ならば極樂淨土もわざ／＼見物に出掛るものはなし、足るを知らぬ凡夫なればこそ樂園の蛇が勳功赫灼として五千年來の今日までバイブルがお役にたつ。山海の珍羞佳肴をならべ一箸味つて其れでお止めと曰はれては出る唾を呑込む瀬はあらじ。羅綾錦繡を貰つても決して召すなと添口上ではあたら簞笥の塲ふさげと呟くそばから平常着も邪魔になる。伊丹から渡來の劍菱まづ一杯と進められ是は結搆甘露の樣だトまだ舌打もするかせぬかの中に過し給ふな節制ジヤぞへと德利の栓をされてハ火の焔へぬだけに餓鬼道よりも苦しかるべし。半分は全量より優れるを知らず一口一杯の辛抱は百年の計策たるを悟らざるへシオッドが馬鹿者ぞ多かる世の中なれば、中庸が肝心ぞと口を酸くして節制の理を說くとも盲目法師に地獄變相の圖を見せたほどに感ずまじ。一杯は又一杯と合滿の出來ぬ跡引上戸になまなか節制を守れと粹をきかせるよりいつそ禁酒戒が肝要じやて。

山澤作次は今眼が覺めた。母が無殘な最期を聞て夢見の惡き

に比べると寒風に吹かれた樣に醉が覺め、常から感心な娘がうるむ眼を見るにつけ現ながらに考へれば前晩のしだら、母はさぞ情なしと恨み玉ひしならん、不慮とは云へ我を止めんとて足踏みはづし給ひしと聞けば面目なさが込上て、娘の手前——日頃の元氣更になし。

「お父さんお歸りよ、みんな待てるから」

「みんな、何處に」

「お邸のお長屋に……奧樣も居らッしやるよ」

「お邸の……奧樣も」　作次は顏背けてうるみ聲「今行くからお前さきへお歸り」

「さふ、ヂヤアお父さんキット歸る乎」　念を押して愁の中にも父が歸ると云ひしを賴みに嬉しげに溝板を常にもなく沈んだ足音、いつか姿は物干の陰になりぬ。

作次は見送りもせず入口に腰掛けたまゝ腕組をなし首うなだれて嘆息も出す。

外からは威勢よく久保村が足音荒く、痲醉劑を覰されても眼の覺めさふな溝板の響、家根にとまりし鴉の飛去るほどなるに、中には山澤が他日には眠つて居る樣。

「どうした山澤」　嘲弄の語氣が顯はれる。

山澤には聞へしか聞へざりしか俯いて返事なし。

「又夢が氣になるか、ハヽヽ」　冷笑をして上り端の湯吞に買て來た德利の酒をつぎ「飮まチエか、否か」

山澤は返事なし。「ア、……」と嘆息をして眼を開きしが組みたる腕は猶は放さず氣のなさゝふに湯吞を見たれど鼻うごめかす躰さへもなし。

「大層陰氣だナ、どうしたんだ」　少し眞面目に問けど山澤は田の畔にたつ石地藏、叩けど笑へど詞はさらになし。頓て拱きたる手を大義さふに解きて起上り、

「おれは歸るよ」　氣のない詞。

「ナニ歸る……何んだ、どうしたんだ」

「おふくろが死んだッ」　愈ゝ力なし。

「おふくろが、ハヽヽ……夢でか」、頭から信ぜぬ返事。

山澤は怨めしさふに久保村を見て常にも似ず色よき湯吞を見向きもせず戶口の柱に凭れて暫し無言。眼は溝板にあれど溝板に見詰るものは塵でうまつた節穴ばかり。

久保村も無言で手酌で湯吞に二三杯、不思議さふに山澤を見詰たが山澤が顏色まで變て好きな酒を吞む勇氣もなく潔ぎ切て居るは此日が初めてと曰へば久保村の不思議がるも無理は

あし。頓て後ろにゴロリと倒れ癇の悪い聲で半間な歌澤節を中音で得意らしく囀りの半分を、跡は口の内で誤魔化してトンダ聲自慢と云ふ困つた癖。

「山澤、上らねエカ。おふくろが死んだつていゝジヤアねエか、手前が歸つたッて生返りもしめエし。オイ山澤、上らねエかッてば……折角おれが刺身を買つて來たのに。エウ……否か、否なら止せ手前に御馳走して貰やあしめエし」、

「今日は歸るよ、ほんとに死んダンダ」浮かぬ調子。

「ダカラ歸るなら早く歸ろッて云ふに……」少しく聲高になつて來る。短氣な人情を知らぬ、氏も育も賤しき久保村には氣に逆へば罵る事珍らしくもなし。

「歸らふヨ……」怨めしさふに久保村を一寸見し心細氣に足は溝板の上——音もせず。

久保村は遽かに聲高に「待ちねエ……山澤」

山澤は氣のなさゝふに振向くと意地の悪い久保村は起上り胙跨をかきてゆる〳〵と湯呑に酒をつぎ甘さうに息をもつかずグツト呑み胸なで下しながら呟やく樣に「イヽ心持だ」

山澤の苦い顔を見て「ハヽヽヽ手前には呑めねエだろう」

「用は何んだ、あるのか」グビック咽喉を無理に押へて見ぬ振——觀ぬ樣に辛抱するその苦しさ。

「用か……あるのよ」人ぢらしな久保村は徳利の酒ドクドクと湯呑み酌ぐ。無殘——山澤は見ぬ樣にしても眼に寫るアノ山吹色、觀ぬ振しても鼻につく得も云はれぬ香、猶ほ斷腸の音色とも聞ゆるはドクドクと云ふ酒の音。久保村が一口呑んで甘さふに舌打した時は五臓六腑が絞られる樣。

「何の用だ……ほんとに用か」

「ウン本當さ」心無の久保村は殘の酒を一と呑にして頷しかめ胸を撫下して「グエー、いゝ心持だ」

「久保村、早く用を曰はネエカ」情なさゝふに山澤が詞。

「ハヽヽヽむづ〳〵して居やアがらア、マア尻を落付けろ甘へ酒だぜ」。嘲弄る樣な口吻。堪りかねて山澤は、

「用はあした聞かふ」向けかへた足を路次口へ。

「山澤、待ちねエッてば」罵しる樣な久保村の高聲。

「又來やうよ……」膠なき挨拶。

久保村は一際聲高に「オイ待ちねエッてば……」

山澤は其權幕に振向ば久保村は眼を据へて、

「昨日の十錢を返さねエか」

「返せ……今持て居やアしチエ」氣の毒さふに山澤が曰へば

久保村はせゝら笑ひ「意氣地なしめ、返さザァ一杯呑んで行け。ハ、、、、有難へ金貸だ」
「マア今日はお預け」　素氣なく斷はつて急足。
久保村は叱りつける樣な聲で「今夜返さないと承知しチエヲ……いゝか」山澤の跡を見送りて「チヨツ馬鹿奴」
獨酌に德利を傾ふけ、ゴロリ肱枕。寢るに布團なく食するに飯なく、耳に聞ゆるは溝板の音目に見ゆるは梁の鼠、是でも樂は又其中にあるものか。楊雄の晏如たるも顏子が一瓢の飮も久保村山澤に比ぶれば物の數ならじ。

寄書

貴社の御議論に反對する意見の御登載を乞ふは異なものなれども既に其例しも少なからず貴社の大度にして駁論と雖も假すに餘白を以てせらるゝを信ずる故に一重に刎輿の榮を希ふなり

○巖本先生及瀨下女史に一言す　秋洲健次郎

今や巖本先生及瀨下女史に一言するに臨み豫め申置たき事あり別事にあらず拙者は近時女學校に關する風說を悉く信ずるものにあらず所謂針小棒大の巷說とは篤く存じ居れども兩君の御說中少々感服し兼ぬる所あるが故に此點に付てのみ禿筆を執らんとするなり幸に風評に雷同附加するの徒と思ひ玉ひぞ。そは本誌百六十七號の中に論ぜられたる事にて高等女學校に於て教員たる人が生徒の爲めに良緣の口を覔むるは適當なり職務に深切なるものなりと云はれし一事なり是れは兩君とも世上所傳の無稽の說を斥け同校の寃を除がんとの御熱心のあまりついく辯護（瀨下女史の御贔屓）に過ぎたるにはあらざるかとは存ずれども一旦紙上に公示せられたるからには最早や平生の御持論と見て一槍入るゝも弱みに乘ずる識りは免かるべし。

尤も高等女學校は其目的女教師を養成するにもあらず又職業家を教育する所にもあらねば同校の目的は相違なきも其良妻となるべきことは仰の如く良妻たり賢母たるものを造り出す所には相違なきも其良妻となるは後來の目的にて此目的を達し得らるゝ樣教育するが同校の目的なるべし良妻たるの目的と（生徒の目的）此目的を達し得る樣教育するとは（學校の目的）少しく其點を異にはすれども既に良妻賢母となり得るの資格を有するに至れば學校は最早や少しも關係なし生徒をして良妻賢母たるの資格を有せしむるは文部省の希望なるべけれど校長及教員が婚姻の媒介するは其希望に之れ有るまじく寧ろ嚴禁する所なるべし拙者は教員が周旋の勞を自らするは如何にも怪しかる事と思ひしに巖本先生の何も不思議と思はずと仰せらるゝは少しく御考違には之れ無や但し他に御深慮御遠謀の候議にや。

瀨下女史は一層深入して論ぜられ男子諸學校の例を引用されたれども拙者は其間差異なき能はざるものと思ふ尤も法科大學卒業生を介し司法官吏の周旋なす如きは正理上より申せば之とても宜しき事にはあらず併し此等は卒業したる後の事にて其實を申せば一私人間の相談なり且つや是等は好まざれば又辭するを得るものなれども彼の結婚の如きは生涯を約する一大身分關係を作るものなるが上に（釋迦に說法）未だ生徒たるの間に之が周旋を爲すに於ては先づ申せば公然媒介なすものなり是れ女史の適例として引き來られし所のものは其實適例にあらずして其間に睹易き差違之ある事と存ず。

尙女史は教員にして媒介の勞を取らざれば好逑を得難かるべしとの御心配一應御尤に聞ゆれども之が所謂杞憂とやら申すべきものならん御說の如くんば何れの學校たると其男女とに論なく此必要あるを見るべし併し實際は此の如きものにはあらで資格さへ備へ居れば好耦は容易に得らるゝものなり少しく實際に就て視察せらるれば諒し思ひ央に過ぎん。

拙者は是より一歩を進め（ちと大業なれど）學校に於て教師たるものが其生徒の婚姻を媒介するの弊を一二點述べて兩君に質し併せて世に問はんとす。

先づ教員と生徒との地位を考察するを第一とす男子の或學校の如く教師獎喰へとやさしくして只尊と敬とを以て其腦裡を滿たし居れり此地位に在る教員の口よりして好緣あり如何やとの勸めありたる時は辭するに甚だ難かるべしと存ず尤も道理上より觀又男子の情より考ふれば假令教師の言葉と雖も教授外の事は辭するに何の憚る所あらんやとの念慮は忽ち浮ぶべけれど女子の性として左樣に斷然云放す事の出來ざるぞ抑て優しき所なるなれ又た之を斷れば教師の意にさからいやせん以來身の爲め惡かりなんなど種々思ひに沈むものなりとは拙者女性に非れど度々承り初の程は是或は天保世期婦女子の情なるべしと思ひ居りしも能々當時の女子を通觀するに少しも其情の異る所なきを發見す男性と雖も教師の意に反き難きものなるに况して女性をやそれとこれとは事變れど有力者の爲さしめたる自白は無効なる如く無形上の强制とも云ふべき（法律語を用ゐたれど法律上の解釋は御

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

免を蒙る）教師の勸めの婚姻は好ましからず此の處は道理上よりは寧ろ人情の方面より觀察を願ひまいらする也。よしんば教師の勸めは實に好耦にして生徒も喜んで應じたりとせんか其女子は誠に幸福の人なりされど他生徒の感情は奈何是れ亦御一考を煩はしたし元より教育ある人たちなれば卑むべき悶熾の念を起さゞるへ保証すれども幾分か教師の意を迎ふるの傾きを引起さゞるべきか是れ最も恐るべく慮るべきの點なりとす一事あれば之より種々の影響を引來るは數の免れざる處なるも是等は默視すべからざるの勢には非るか。

予は如何なる目的を以て成れるものなるも苟も學校にあるの間は（媒妁學校に非るよりは）決して教師は生徒に對て婚姻の媒介など爲すべからざるものなるを信ず苟も一方に教師の肩書ありて一方に生徒の身分附若するの間は教育外の勞は無要なるべし況んや教師は男性にして生徒は女性に係るをや。

拙者匪才の身を以て敢て猥りに兩君の御高説に對し彼是喙を容るゝは分を越ゆるの思あれど疑の存する處は叩かざるを得ず意見の異る所は述べねば分らず之れ大膽にも異見を陳ぶる所以なり文字上敬禮を失する廉あらば無學之故と可成敬意に御解釋を願ひ候。

新報

（此の欄内自由に轉載を許す）

○雨止む率ざ關戸を捲わん

「日本」新聞は女子教育に關する名說を得んとして諸大家に質問し、既に若干の答案を得たるによりて近日之を其紙上に掲げんとし、朝野新聞は女子教育論と題する懸賞文題を掲げて、廣く其の答文を募れり、吾人實に之を喜こぶ。

○羅馬字會

去る頃羅馬字會の大會あり、諸先生方が熱心に演說せられしよし、末松博士の演說に「今日の羅馬字會はチベッカを使へば御盛んの事と言ひたけれど直言すれば甚はだ不繁昌の有樣なるが是は日本の爲め捨て置くべきに非ざれば今日は實に何如にして此會を盛んにすべきやを研究すると最も必要なりと信ず」とあり、吾人も亦た實に然りと同ず、因て吾人が羅馬字會員に御勸告申したしと思ふは、諸君先づカナの會を盛んにせられては何如ん、カナの會にして若し行れずとあらば迚も羅馬字會の盛んとなる望みあらずと察す、蓋し漢字は音に於て、訓に於て其義を現はすのみならず、亦た其顏色に於て現はす、譬へば樹木の繁茂たる如く、因と云へば自づから窮屈なる如く思はす、特に一字にして數箇の觀念を結晶し存し、一片視を以て直ちに多くの意味を現するの効能あるところ、之をカナ若しくは羅馬字に因て寫せば、少なくとも二字以上八九字を以て初めて其觀念を現ず、之れ今の日本人にカナ若くは羅馬字の面倒なるゆゑん也、人若しジョンブライトの演說に感じてアングロサクソン語の感動力多き所以んを窮め、直截奇拔寸鐵人を殺す短文章の極めて人を動かす所以を知らば、カナ文羅馬字文の行はれざる所以を知るべし。但し時勢一變して既に行はるゝに至れば、其行わるゝは先づカナ文よりす、何んとなればカナは日本國の舊知已にして總べての日本人に知らるゝ所ろなれば也、先づ漢字を破ぶるに於て何すれぞ綴字法發音法に入籠しく言ふの暇まあらん、カナ文行れずば羅馬字も行れじ、羅馬字會員先づカナ論に於て試みて可なり。

○言文一致

「文」雜誌二三ケ月來の紙上は、言文一致の決鬪場と見ゆ、何ぞ其の亂擊のいよく激烈なるや、吾人は只だ一言す、言文一致の行わるゝと行はれざるとを知らんと欲せば、請ふ去てカナの會及羅馬字會の運命を見よと。　今日羅馬字會は宜しくカナの會に助勢すべし、今の言文一致論者は宜しく此兩會に助勢すべし、總勢一味して合戰せば手早く何れにか埒明くべし。

○浮　雲

梅雨は晴れなんとを願へども、浮雲は出でなんとを望む、待ちし甲斐ありていよく明日よりと定まりしよし、今まや春花一變となりて夏の盛り未だはかぐしからず、此時に當て雲氣下る、都の花まさに一化粧すべし。

○文學界の伯夷叔齊

二葉亭主人の著を思ふと共に、嵯峨野舍氏の小說を望むと亦た尋常ならず、氏が「初戀」は正面より著者の潔白を示し、其の「隠れ玉子」は裏面より示めす、吾人隠れ玉子を讀みて鶏がハキダメに降りしと思いき、願くは今後得意の請思を凝らして早く其純潔の著を惠み來れ。

○國の基出てすんば風評を何如ん

萬目の燎賑と爲れる今月發兌の國の基には、何如なる明説や出づらんと吾々人も待ち構へてあるなり、元來一日出版の筈なれども今三日未だ之を見るを得ず、故に數憾ながら次號に於て一言するの榮を得べしと附言す。

○義　俠　社

靜岡の新聞に云はく、

今回靜岡市新通一丁目十番地に設置したる義俠社と呼は無謝儀にて上書建白書の起草、結社結黨其他各組合の定款規約書の起草、内外の奸商に對する百般の嚴談、公共の事務に服する者に對する忠告、勸告其の他一切の裁判、各新聞雜誌に對する攻擊の論文起草其他政談、學術、宗教（佛教に限る）演說の招聘に應ずるの目的をもて設立したる一社にて同社へは磊落奇偉の壯士、慷慨悲憤の壯士、胴精滸の壯士、温厚着實の壯士に限り面會の上入社を許すとあるべしとの事也

○女　壯　士

大坂の新聞亦云はく、

大坂事件に加盟したる岡山縣人景山英女、大坂の松永閑香、竹中りよ、其他島津お政なんど云ふ女壯士の發起にて本月上旬大坂に於て關西婦人大同會を催ほすよし景山英女は勇壯活潑の女丈夫數十名を誘引する爲め此程より岡山及中國地方に漫遊中なるが其目的とする處は男尊女卑の弊風を洗滌し大に女權の擴張を計り從來日本婦人の弊習を改良するにあるよし此發起人中には其行爲粗暴淺ましき男子の如きもの或は足を洗て泥水社會の籍を脫せし日尙ほ淺き者もありと云ふ。

○美　人　諍

西京の新聞に亦云はく、

明廿三年東京に於て開かるゝ內國勸業博覽會出品の事に付き京都市商工組合にて出品奬勵委員を撰擧し目下其奬勵最中なるが七月十日を期として出品目錄を府廳に差出すべき筈なれば美術自慢の京都人は得たり顏に何にか珍らしき品を出して他府縣の人を驚かし呉れんと市中到る處に其相談をなせる中にも祇園新地貸座敷業の輩は京都無二の名物白拍子舞即ち都踊の一座を出品せんと昨今協議を爲し居るよし藝妓や雛妓は之れを聞き大悅ひにて珍らしき花の東京を見物せんと今より噪ぎ廻るもあれば又た什麼方に逢ふを此上なき樂しみとし日を數へて待つもありとか發起人の目算にては必ず意外の收入ありて尋常の美術品よりは却て喝采を博すべしと信し居ると云ふ（評、吾人すでに活人諍に反對す況んや若し如此きと實まあらば決して容赦す可らず）

○人心彌よ倦めり

以上三幅の對話は吾人之を時事新報及日本新聞に聞く、嗚呼人心いよ〳〵倦めり、奇斷偏怪の事更に益す流行せんとす、此時に當て、嚴毅方正、變ぜざると山の如く、固たきと鐵の如く、守ると堅城の如く、たゞ義のある所ろ勃然蹶然として大動するもの、抑そも何處にありや。

○福島人物評

明治之輿論第十九號、福島人物評の中ち、列擧せられたる女秀才左の如し、

綱島佳吉氏夫人　君の令閨は西京の產にして美貌福街第一たり君の傳道事業又令閨の內助に出づる者多しと聞く、信徒の勸化せらるゝ際ろ令閨の力興つて多きに居るとの評あり、令閨は殊に唱歌に長じ、其の美音は眞に福音かと疑はるゝと世人は云へり。

西卷かい子　君は米國紐約克中學校及び神學校の卒業生として、當時東北宗教改正の爲め、北國傳道師の設置に係る「ノンテン」會に入り、其主義を擴張せんとて福島に來り、高等女學を教授する一人なり君は新潟縣平民にして、年齡は二十五歲位なりと聞きぬ。

三宅いし子　君は京都師範學校の卒業生にして、曾て大坂の或る豪商に嫁せしが、大に見る所ありて、自から離緣し其の後宮內省へ奉職し、後また辭して、東京府病院に入り產婆學科卒業の後、山形縣の招聘を受けしが更に福島に轉じ、今猶其の業務を執らる、人或は一見しておてんば娘と評するならんが是れ豈評のみ、余は嘗に某氏の宅に於て屢〻君に面接したるとあれば、其の人となりを知れり、君は交際に熟練し、世事の經驗に富み、碁術拙ながら其の與義を極む、奧州の田舍に於て實に空前絕後と云ふべし、彼の中島信行氏の內室なる岸田湘煙女史とは豫て同學の好ありと云ふ。

三科とさ子　君は栃木縣師範學校卒業生にして當時福島高等小學校女子部長たり、曾て聞く君は女子風俗改良會及び婦人會の主唱者にて、其の才識は女流中の卓絕なるものなりと。

和田れん子　君は曾て東京女子師範學校を卒業し、其の後栃木師範學校の招聘する所となり、全縣中和田豐氏（昨今福島中學校長）に嫁す、輓近福島に來り師範附屬校の教員より、幼稚園の主務に轉じ、傍ら中學校の囑托を兼らる、性溫雅沈靜にして女子の規範とするに足る、昨今東京府下に於て、艷聞嘖々たるお孃さん方とは日を同ふして語るべからず、宜べなり世人が君及び三科西卷三宅の四氏を以て福島の四天王と稱するや。

○美　人　鏡

何如なるを美人と云はん、笑わざるがよし、鳩に豆鐵砲打ちかけしが如き皆し、變似の如きスマシ込んたる皆し、とはすでに前年度の討論筆記に殘るのみとなりぬ。然るに「文庫」は美人の形容を募集し、東京靑年會雜誌は「理想の佳人」の解釋を質問せり、世上一切の才子よろしく名說を寄せ玉へ。

○英國女子被選擧權

サンダルスト夫人が州會議員に撰擧せられたるを不當としたる所へは、其後控訴裁判所説出されたれど、遂に之も列席判事六名同說の判決を以て前裁判を承認し、いよ〳〵女子をは被撰擧權なき者と定まりたり、此は議員會にマンとある人なる文字は時として用ゆる如く只だ男子なりとの主意を以て立論せられたる也と云ふ、然るに茲に刑法の條目中に同じくマンとありて之により男女同樣に刑を受たる判決甚だ多し、此の場合に於てはマンの文字即はち人間と云へる意味となるなり、故に英國の法律文は撰擧に行くときはマンは男なりと定め、牢屋に行くときはマンは男女なりと定めざる可らず、甚はだ不都合なる如く思はるゝに付ては此後定めし亦た之に付て論辨あるべしと信す。然るに此のサンダルスト夫人と同時に撰擧せられたるコブデン及コンスの兩孃は今尙ほ依然として州會議員たり、此は何如なる故かと問ふに、法律上の訴訟未だ起らずして現に女性が撰擧せられ了したる上は、之に對して訴へを起し其の無効を論訴するものあらざる限りは、固

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

より其儘にてあるべき習慣なれば也さ、故にサンダルスト夫人等が撰擧せらるゝ以前より既に女子の議員ありしことゝなるに、之を無効なりさ訴へ遂に法律文面より之を正當に判決したるは即はち今回を以て初めさす、嘗しサンダルスト夫人に席を奪はれたる前議員之を訴出したるならん。左れど彼のコブデン、コンスの兩孃に對しては未だ訴ふるものあらざるのみか、現にロンドンの州會に於ては會議を催うし、女議員を置くの利益を主張して內決する所ろあり、云く成べく方便を盡して此等兩議員を其儘に勤めしむるやうにすべしと、實際の勢ひ如此なればこそ則ち兩孃は安らかに議員とし殘ると見へぬ。故に英國實地の景況は決して女子議員に反對するものにあらず、たゞ其の律法を重んずる莊重なる常例により、久しく習慣上に默許したる事件を冷然法律上に訴へ出られ、遂に止を得ず如此く判決したるものと思はる。左れば遠からざるうち議員令に多少の改令を生ぜんと疑かひなし。

内　報

○加藤錦孃　五月十八日の米國女學雜誌は云く、五年前日本より來りし同孃は今度サンフランシスコを經て歸國せらる孃はサレム師範校及ウエルスレー大學にて修業したり而して在米中に基督敎を信じサレムのタナークル敎會に屬す孃が初め米國に來られしころは日本政府に於ても孃が宗敎を信ぜざるとを希望せられたれど凡り信仰上の自由は何如にさも爲しがたきものなり。

○公立學校長拜命　東京府櫻川高等尋常小學校長岡田忠成氏は櫻田女子高等尋常小學校長兼訓導(月俸廿五圓)に岡村增太郎氏は櫻川小學校長兼訓導(月俸廿一圓)に櫻田女子小學校長山村甚頴氏は東京府小學校簡易科教員速成傳習所教員を去日拜命。

○卒業　中六番町櫻井女學校に於ては高等科生靑木まさ、栗塚夫人、一柳ちか、長谷川きた、神田夫人、福山てい、小野小春、小川さく、矢島たつの九女史卒業し○十三番海岸女學校に於ては英學科に大東赤三、稻垣なつ、石川みどり、中島たい、西村むつ、小笠原たん、荻原ちよ、佐々木ゆう、宇田川よし、鵜飼ます、山口ちよの十一子、日本學科に於て中島たい子を除く上記の十子卒業し○神戶英和女學校に於ては竹內文、長谷部よね、布施つね、今井幸、木村信、江浪小常、林靜、星野貢、山脇花九女史卒業されしよし。

○演習　去一週間は毎夜毎日各女學校に演習會ありて吾人は切めて八つ丈なりとも耳目を持ちたしと思ひし、櫻井女學校の文學會に於ては其英文に感服し、十三番女學校に於ては音樂と菊花の歌うたひし趣向に感服し、靑山英和女學校に於ては女子一生七變化の小演劇に面白く覺へたり。

○獨立女學　今秋設立せらるべき彼の獨立女學校の種ともなるべき上二番町に現今加藤とし子バラ孃等が教授せらるゝ、職業女學校は生徒十三名ありて半日職業し半日修學するなり吾人此頃ろ招かれて一場の演說を爲したるが生徒の諸資優雅なるを見て大ひに敬服したり蓋し獨立の氣象なくんば獨立の學を得可らず此校の如き主旨は何よりも先づ賛すべきもの也。

○橫濱より亦　一夫一婦建白の事亦橫濱にも賛成家あり即はち有志者百餘名は一日午后八時より住吉町二丁目の基督敎會堂に會し先に東京にて建白したる建白書を議題として討議の末新に建白書を起草する事さなり其起草委員に野津操之助、島田加志子、稻垣末子、田村德、古莊三郎、林翁、二宮安次、山本秀煌の諸氏が撰定されたり。

○看病婦教科書　過般來海軍中央衞生會議に於て編纂中なりし海軍看病婦教科書は此程委員より浄書の上既に同省大臣へ差呈したりさ云ふ。

○コルフ孃の音樂　目下橫濱に在留せる有名の音樂師コルフ孃は去る三日同地八十八番館コクニツク俱樂部にて音樂を演せられたる由。

○幼稚園設立の計畫　牛込區寺町なる森本祐外數氏が發起さなり府下に完全なる一の幼稚園を設立せんさて目下專ら該組織調査中の趣なるが頗に米國風に倣ふ由にて設立の上は米國より女教師を招聘するの見込なりさ云ふ。

○卒業證書授與式　京都同志社女學第十二年及京都看病婦學校第二年卒業生の證書授與式を去る廿六日同志社禮拜堂に於て執行し新島襄氏の演說生徒諸氏の親文、唱歌等あり來賓四百余名にて北垣夫人も臨會せられたる由。

○東京音樂學校　同校にては來る九月を以て男女二十名宛の生徒を募集する趣なるが從來は男女の教場に區別ありとへ云ふものゝ僅に壁一重か或へ羽目板を隔る許にて遊歩場等には更に區別さてはなかりしが自今は男子部女子部となして萬事に判然たる區劃を立つる都合なりさ云へり。

外　報

○米國女子傳道會社　合衆國中に女子の傳道會社二十二あり之より宣教師を派遣せるもの七百五十一人去年中に義捐せし金は百〇三萬八千二百三十三弗、創立以來の義捐金總計金一千〇三十三萬五千百二十四弗なり。

○米國女大學生　米國女大學卒業生會去年の年報によるに會員即へち女大學卒業生總計七百四十八人あり十四の女子大學及び男女合教の大學を卒業したるもの也但し前者より出しは五百五人後者より出しは二百四十三人、扨て此の卒業生中婚姻せしものは全數の二割七分にあたる。

○保守黨婦人の證書　此程愛蘭ダブリン府にてメツクスペリと云ふ一婦人頓死したり此の婦人は保守黨に關係ある身柄なるにも拘らず平素愛蘭自治黨の首領パーネル氏の俠骨を欽慕し兼て用意し居たるとさ見え證書の中に金二千磅(一萬二千圓)をパーネル氏に贈り聊か仰慕の寸志を表したき旨を記しありしさ云ふ。(七月三日日本)

○七曜日萬年表　定價金五錢

此表七曜日を一日に分らしめ且つ千萬年に通じて用ゐらる可き便利至極の者あり

本多錦吉郎著　文部省撿定濟

○小學畫手本　全十四冊

定價一冊ニ付　自一至七　各　三錢五厘
自八至十四　四錢

本多錦吉郎先生著
文部省撿定濟　小學畫手本附錄

●臨寫法　全一冊　定價八錢　郵稅四錢

此書は圖畫の法則と畫學授業の方法とを丁寧明瞭に說示したるもの也就中其授業法の如きは先生多年の苦心を積み一々之を實際に徵したるものなれば世の空理想像を以て其術を講じたる物とは自ら徑庭の違あり故に一たび之を繙けば遐邑僻陬に良師に乏しき者は師無して其道を知るを得可く敎師學生學科に鞅掌するの士は少しく勞して其効を修むると多きは疑ふ可からず希くは世の書學に志すの士試に一本を購て弊店曩に已に發行の畫手本と對照し其虛實を知り給はんとを乞ふ

井上政共著

○論理ノ新軌軸　全一冊　正價三十錢　郵稅六錢

右ハ世間在來論理學說ノ非ナルチ看破シ別ニ論理ノ一新軌軸チ著サレシ者ナレバ普通學者ノ論理書トハ雪壤ノ違アリ殊ニ書中理學、心理、經濟、法律學等トノ學科ト關係スル有樣チ分論シ及論理學ノ秘訣チ記載シタレバ唯リ論理ノ新活用チ知ルニ必要ナル耳ナラズ右等諸學科ノ主眼チ覺ルニ最モ恰好ノ良書ナリ

東京神田雉子町三十二番地
團々社書店

四竈訥治先生撰曲

選曲唱歌集

第二集以下近刻

第一集　定價金十錢　郵稅金四錢

四竈先生の音樂に熱心にして且つ長ずるは皆人の知る所なり本書は最も優美善良なる曲を摘み撰集せられしものなれば苟も音樂を學ばんと欲する才子佳人はこれに依りて切磋琢磨し給はゞ眞佳の妙與を得るに至るべし請ふ一本を購ひて其言の誣ならざらんことを知り給へ

發行書肆　東京日本橋區若松町　榊原友吉

特約販賣所　銀座四丁目　博聞社
通一丁目　大倉書店
南傳馬町　目黑支店

交詢案內

（催促する勿れ郵券十錢送れ委細に申來れ）

●雇ひたき方　（甲）

十二	下婢	年齡廿歲ヶ五十歲迄の基督信者を雇入度者あり
十五	召使	家內の手助けとなり小兒の世話をなすべき年少女子を雇ひたし尤も讀書算籌を學びたき志あるものを望む
十六	召使	重に小供の世話及裁縫等にして家事の手助けとなるべき年少の女子を雇ひたき所あり但官員の御內なり
二〇	取締	基督教信徒にて年齡三十才四十才なる獨身の婦人にして女學校ニ寄宿し寄宿生徒の世話を爲し得る者を傭入れ度處あり但し算籌並に日本裁縫に心得ある者
二一	中働	年齡廿五才位にして一ト通り裁縫の出來るものを一圓以上の給金にて雇ひ度處あり

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

東洋英和女學校計畫一斑

當校暑休ノ爲六月廿九日閉校來ル九月七日開校寄宿生ハ當日入舍通學新入生ハ同九日入校アルヘシ

當校ハ我日本ノ婦女子ニ更ニ高尙完全ナル敎育ヲ授ケンガ爲メ從來ノ普通科學期ニ更ニ二年ヲ加ヘ高等科ヲ設ケ特別ニ數學簿記和漢文學地理歷史心理學敎育學等ヲ敎授シ英語科中ノ數學ハ之ヲ止メ其時間ハ英文學及ヒ作文ニ用ユヘシ此改正ハ文部省敎員學力撿定試驗ヲ受ケ敎員免狀ヲ得ント欲スル者ニハ殊ニ便利ニシテ甚好都合ナルベシ

所望者多クシテ一級ヲ編成スルニ足レバ別ニ彩色及繡取ノ科ヲ設クヘシ

且敎師ヲ增加シテ充分適當ナル敎員ヲ持續センコトヲ勤ムベシ

又九月ニハ新ニ科程規則ヲ定メ上梓シテ配布スベシ

現今ノ規則書ヲ望ム者又其他照會ヲ欲スル者ハ左ノ處ニ書翰ヲ投シ或ハ自ラ御出頭アリタシ

明治廿二年六月

麻布東鳥居坂町十四番地

東洋英和女學校

本日午後一時より神田淡路町貳丁目小川女子小學校に於て臨時會相開き候間會員諸君は勿論會員外の婦人方も御來聽あらんことを希望す尙ほ當日の講師演題は左の如し

色川國士君 （未定）

足立寬君 （海浴之說）

京橋區日吉町八番地

私立大日本**婦人衛生會**

○（倫）（理）（の）（基）○

紙數小形卅四頁
定價金貳錢
郵稅金貳錢

右は、一小冊子なりと雖も、一夫數婦の人情に悖り自然に背く所以を痛論し一夫一婦の正理が社會全躰に行はれざれは、今日我邦に最も欠乏せる一家の幸福は得て望む可らざる所以等を切論したる者なり、

發賣 京橋區日吉町 女學雜誌社 京橋區日吉町 民友社 京橋區加賀町 警醒社

遞信省認可

發兌

七月。	六日	十三日	二十日	廿七日	
八月。	三日	十日	十七日	廿四日	卅一日
九月。	七日	十四日	廿一日	廿八日	
十月。	五日	十二日	十九日	廿六日	

定價

一冊。六錢　郵稅。一錢　（但府內無郵稅）

十冊。五十八錢　郵稅。十錢　（同前）

半年分　一圓四十三錢　府外は　一圓六十九錢

一年分　二圓六十錢　府外は　三圓十二錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

一行（廿七字詰）　一回　前金拾錢

同　三回以上　一割引

同　六回以上　二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町殿々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町頁明堂○同京橋區木挽町堂丁目萬字堂○同本鄉區元富士町盛春堂○同本鄉區春木町二丁目解明堂○同本鄉四丁目文壽堂○同橫濱住吉町角田屋貞春堂○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彥根西內大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年七月四日印刷
明治二十二年七月六日出版

發行所　東京京橋區日吉町八番地　女學雜誌社

編輯兼發行者　東京京橋區日吉町八番地寄留　巖本善治

印刷者　東京芝區源助町十一番地寄留　森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.
"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1.69 six months, *yen* 3.12 per annum, in advance.
Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, Kyobashiku, Tôkyô, Japan.

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY